

石川県 金沢市

金沢城下町遺跡(飛梅町3番地点)

— 金沢くらしの博物館リニューアル工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —



平成31年3月
(2019年)

金 沢 市
(金沢市埋蔵文化財センター)

石川県 金沢市

金沢城下町遺跡(飛梅町3番地点)

— 金沢くらしの博物館リニューアル工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

平成31年3月
(2019年)

金 沢 市
(金沢市埋蔵文化財センター)

例 言

1. 本書は、石川県金沢市飛梅町3番31号に所在する金沢城下町遺跡（飛梅町3番地点）の発掘調査報告書である。
2. 本書で報告する金沢城下町遺跡（飛梅町3番地点）は、金沢市文化施設課（当時：文化政策課）が施工する金沢くらしの博物館リニューアル工事に伴い、平成27年度に金沢市が発掘調査を実施したものである。
3. 発掘調査は平成27年（2015年）7月17日から8月31日まで実施した。
4. 出土品整理作業は平成28年度から同30年度まで実施した。
5. 発掘調査、屋内整理、本書の執筆・編集、写真撮影は谷口明伸（金沢市文化財保護課主査）が担当した。
6. 発掘調査及び屋内整理にあたっては金沢市埋蔵文化財調査委員会の指導を受けた。

金沢市埋蔵文化財調査委員会	委員長	谷内尾晋司（平成29年度まで）
		小嶋 芳孝（平成30年度から）
	委 員	横山 方子
	〃	小嶋 芳孝
	〃	米澤 義光
	〃	藤田 邦雄（平成30年度から）
7. 発掘調査にて出土した遺物、作成した図面、写真台帳等はすべて金沢市埋蔵文化財センターが保管している。
8. 発掘調査の実施及び本書の刊行にあたり、金沢くらしの博物館及び金沢市立紫錦台中学校を始め、多くの関係機関・関係者に多大なご理解とご協力を賜った。深く感謝申し上げたい。

凡 例

1. 本書に掲載した各図版の指示は以下のとおりである。

- ・各図の縮尺は原則としてスケールを付し、表題末にも示した。
- ・遺構平面図は航空測量の成果を再編集して掲載した。掲載図版に関係する遺構測量は日本海航測株式会社が実施し、図面作成も同社が行った。
- ・遺構平面図の方位は全て座標北で、座標値は世界測地系 2000 に基づいた公共座標（MK-WE 座標系第Ⅶ系）に準拠している。
- ・遺構図の水平基準は海拔高で、単位はメートル（m）で示した。
- ・遺構名には以下の略称を用いた。
井戸：SE 土坑：SK 溝：SD 小穴：P
- ・遺物図は基本的に遺構ごとの掲載としたが、木製品については図版組みの関係上、陶磁器類の後に一括して掲載した。

2. 観察表については以下のとおりである。

(1) 遺構観察表

- ・遺構観察表は検出した遺構を遺構略称順に掲載した。
- ・「長辺」「短辺」欄は遺構のおおよそ最も長い箇所と短い箇所を（m）単位で記した。遺構の一部のみを検出した場合は現存値を（ ）付で記した。深さが未検出の場合はその旨を記した。

(2) 遺物観察表

- ・遺物観察表は陶磁器類、瓦類、金属製品、石製品、木製品に分けて掲載した。
- ・遺物番号は実測図及び写真図版の番号と一致する。
- ・「器種」「種別」欄には形状・材質等から判断した遺物の種類を記した。
- ・各遺物の量法は次頁の区分に従い各記号欄に示した。
- ・計測値の単位は特に指示のある場合を除き（cm）（g）を最小単位とした。
- ・（ ）付きの計測値は現存値を示し、陶磁器類では復元数値に不安の残るものにも用いた。
- ・「遺存」欄には径を復元するのに用いた部位と 12 分割の遺存度を記した。
- ・「軸葉」欄のうち、複数あるものはその工程順に記した。
- ・「産地」欄には遺物の器形、胎土の色調・調子などを基準に判断した産地を記した。
- ・「実番」欄は遺物実測図の実測者の通し番号で、保管してある遺物及び実測図の番号と一致する。

3. 土層注記及び遺物観察表に示した色調は、小山正忠・竹原秀雄 2006『新版標準土色帳』（日本色研究事業株式会社）による。

目 次

第1章	調査に至る経緯と経過	1
第1節	調査に至る経緯	1
第2節	調査経過	1
第2章	位置と環境	4
第1節	地理的環境	4
第2節	歴史的環境	4
	(1) 金沢城下町の概要	4
	(2) 金沢城下町遺跡の周知化	5
	(3) 周辺の遺跡	6
第3章	遺構と遺物	8
第1節	発掘調査の概要	8
第2節	遺構と遺物	8
第4章	総括	32
第1節	調査区の変遷	32
第1項	近世	32
第2項	近代以降	34
第2節	遺構と遺物の概観	35

写真図版

報告書抄録

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

本書で報告する金沢城下町遺跡（飛梅町3番地点）の発掘調査は、金沢市文化施設課（調査当時：文化政策課）が施工する金沢くらしの博物館リニューアル工事に伴い平成27年度に実施した。所在地は石川県金沢市飛梅町3番31号である。

金沢城下町遺跡（飛梅町3番地点）は過去に2回の発掘調査事例があり、本書の発掘調査が第3次となる（第2図）。第1次は平成25年度に実施した紫錦台中学校屋内運動場改築工事に伴う発掘調査で、第2次は同26年度の準用河川源太郎川雨水貯留施設整備工事に伴う発掘調査である。いずれも本書の調査区に近接する発掘調査である。

金沢くらしの博物館は、昭和53年に金沢市民俗文化財展示館として開館して以来、1階を展示室として一般開放し、2階は収蔵スペースとして活用してきたが、展示内容及び展示スペースの拡充の必要性が生じてきたため、2階を展示スペースとして活用するとともに、耐震化、バリアフリー化を目的としたリニューアル工事が計画された。工事は平成21年度の基本計画策定、同22年度の基本設計作成を経て平成27年9月から同28年8月まで実施された。リニューアル工事終了後の平成29年度には本館が重要文化財に指定された。

この中で、バリアフリー化に伴い本館後背にエレベーター棟を増設することとなったが、当該箇所は周知の埋蔵文化財包蔵地である金沢城下町遺跡の範囲内にあり、加えて過去に隣接地で発掘調査を実施していることから、当該地にも遺構の存在が想定された。平成26年12月1日に金沢市文化財保護課が当該箇所において埋蔵文化財の試掘確認調査を実施したところ、江戸時代の遺構と遺物が確認されたため、工事主体の文化政策課と調査主体の文化財保護課が協議及び調整を行い、平成27年度に発掘調査を実施することで合意を得た。調査時期は隣接する紫錦台中学校の夏休み期間に合わせて実施することとした。

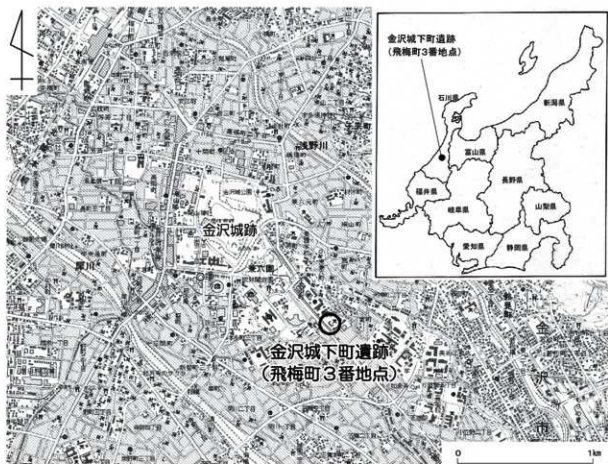
第2節 調査経過

調査区は前節のとおり金沢くらしの博物館の後背にあり、旧便所棟に隣接する位置にある（第3図、写真1）。同博物館に隣接する金沢市立紫錦台中学校の運動場に面し、平成25年度の第1次調査区と隣接する。発掘調査は平成27年7月17日から8月31日まで実施し、井戸跡、土坑、溝、ビッドなどの遺構を検出、容量36ℓの遺物箱にして計5箱分の遺物が出土した。以下に発掘調査日誌の抄を掲載し、その経過とする。

発掘調査日誌抄

平成27年度

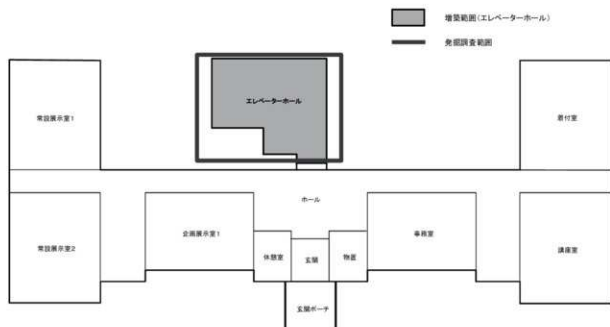
7月17日	調査区仮囲い設置（～20日）	8月20日	SK01はは掘削完了、形状判明
7月22日	表土掘削	8月21日	写真測量
7月24日	発掘調査開始、遺構検出	8月24日	全景写真、遺構個別写真撮影
7月28日	SE01、SK01等遺構掘削開始	8月27日	調査区埋め戻し
8月4日	グリッド測量	8月31日	機材等撤収、発掘調査終了



第1図 金沢城下町遺跡(飛梅町3番地点)の位置



第2図 発掘調査位置図



第3図 金沢くらしの博物館1階平面図及び発掘調査範囲



写真1 発掘調査区

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

金沢城下町遺跡は石川県金沢市に位置し、金沢城を二重に取り囲む惣構に囲まれた地域を主体とする約200haの範囲に広がる近世城下町遺跡である。

石川県は日本列島本州の中央部日本海側に位置し、日本海に突き出た能登半島とその基部に広がる平野部及び山岳部からなる。西南部に福井県、東部に富山県、南東部に岐阜県と接し、北は日本海に面する。旧国名は半島部分が能登国、それ以南が加賀国である。

金沢市は旧加賀国の北部、石川県の中央やや南に位置する、面積468.64km²、人口約46万6千人を抱える石川県の県庁所在地であり北陸地方の中核市の一つである。市域の約60%が林野であり、約30%を住宅・商業地が、約10%を耕地が占めている。藩政時代においては加賀藩前田家の居城である金沢城の城下町として繁栄し、太平洋戦争時の戦災を免れたこともあり、特に金沢城周辺の市街地に住時のまちなみを色濃く残している。他方、JR金沢駅以北の扇状地においては区画整理事業による新興住宅地や商業区域が急成長し、県庁移転や北陸新幹線開通などの影響によってビジネス街が発展するなど、藩政期以前の様相とは大きく様変わりしている。

金沢市の地形は東部の丘陵地帯と西部の平野地帯の大きく2つに分けることができる。前者は白山山系を出自とする山間部とその裾に広がる丘陵部からなる。後者は丘陵地帯を水源とする犀川及び浅野川の二大河川を主体とする大小の河川によって形成された沖積平野であり、浅野川以北の北部平野、浅野川と犀川に挟まれた西部平野、犀川以南の南部平野に三分される。金沢市の中央部には前出の二大河川が西流し、両河川に面した台地裾には河岸段丘が形成され、その間には小立野台地が位置する。小立野台地の北西端には加賀藩主前田家の居城である金沢城が位置し、藩政期から現代に至るまで市外を中心城を形成している。

本書で報告する金沢城下町遺跡（飛梅町3番地点）は金沢城から南東約1kmの小立野台地上に立地する。調査地は金沢市立紫錦台中学校の敷地内にある金沢くらしの博物館の後背に位置する。

第2節 歴史的環境

(1) 金沢城下町の概要

金沢城下町とは、近世加賀藩の藩主である前田家の居城である金沢城を中心として形成された町を指す。城下町のはば中央には近世北国街道が縦断しており、そこから枝分かれする形で宮腰往還、鶴来街道、二俣越などの街道が放射状に道を延ばしている。

城下町の中心たる金沢城は、天文15年(1546)に浄土真宗本願寺支坊としてつくられた金沢御堂（尾山御坊）を前身とする。近辺には中世北加賀の流通の拠点たる山崎窪市（現尾張町周辺）がすでに存在していたが、本願寺は近郊の村々から門徒の商工業者を集結させ、窪市在郷の商人と合わせて商流通経路の掌握に務めた。この時いわゆる金沢古五町（南町、堤町、西町、後町、近江町）が形成され、これらの地域を中心に寺内町が形成される。そしてここが当時の軍事・経済両面の拠点となり、現在の城下町金沢へとつながる源流となっていた。

そうした中、金沢城下町の形成に転機が訪れたのは天正8年（1580）のことで、織田信長の命を受けた佐久間盛政が金沢御堂を攻略、跡地に尾山城を構えた。佐久間盛政は金沢御堂の時期に存在していた古五町のほかに松原町、堤町、安江町などの整備を行い、それを基点とした城下町の整備に着手

した。この時期の町割り現在にまで至る金沢のまちなみの基礎となったといえる。

天正11年(1583)、柴田勝家が賤ヶ岳の合戦で羽柴秀吉に敗れるとその配下の佐久間盛政も金沢を追われ、替わって北陸制圧に功績のあった前田利家が加賀国を与えられ金沢城に入った。以降、明治2年(1869)の版籍奉還に至るまで、金沢は加賀藩主前田家の統治下に置かれることとなる。

慶長元年(1596)に前田利家は加賀国のほか能登・越中の計3国の領有を安堵され、2代利長の頃には100万石を超える石高を領するようになり、結果家臣団の急激な増加をもたらした。主君の警護を主たる職務とする武士階級は必然的に主君の居住地の近辺に居を構える必要があり、城下には武士階級が集住することとなった。武士階級は基本的に消費階級であることから必然的に生産・流通階級である町人も城下町に集住することとなり、結果、城下には武士階級以外の人々を居住させるための敷地の確保が急務となり、城下町の本格的整備が行われることとなった。

初期の金沢城下町は上級武士を城内およびその近辺に屋敷を構えさせ、他の家臣はその周囲に居住させる内山下の形態をとっていた。また、国内各地より商人や職人を招聘し経済機構の整備を図ったことによりさらに城下の周囲に商人・職人町が展開することとなり、金沢城を中心に身分階級により同心円状に居住地が広がる状況となった。その後、さらに集住する武士・職人・商人の居住地を確保するために浅野川・犀川の河原の整備や城下近郊、特に北辺に存在していた村落をより郊外に移すなどして新たに町地を造り出すなど、城下の拡大も図られていった。それに伴い軍事拠点としての整備も合わせて実施され、慶長4年(1599)には内惣構、慶長15年(1610)には外惣構を築き金沢城の守りとしたほか、慶長から元和年間にかけて城下にあった寺院を寺町台・卯辰山麓・小立野台の3箇所に集め、三大寺院群を形成せしめた。三大寺院群は各街道の要衝に配置され、有事の際の防衛戦としての機能を果たすほか、領内の一方向寺院及び門徒への威嚇・監視を行うという側面もあった。三大寺院群は現在に至るまで金沢城下町の景観を構成する重要な要素の一つとなっている。

金沢城下町の成立のもう一つの契機となったのが、寛永8年(1631)と同12年(1635)の2度の大火、いわゆる「寛永の大火」である。城下町の約8割が焼失したといわれるが、大火後の都市復興は機能的な城下町の整備を行う絶好の機会でもあった。具体的には、金沢城内に居を構えていた上級武士の上屋敷を城外の要所に移転させ、それに伴い移転地に専従していた下級武士や町人をさらに郊外に移転、そして北国街道の現在の位置に尾張町・十間町・近江町・西町・堤町・南町などを移し、御用商人など格式のある商人たちに店を構えさせた。これらは城下町中核の構成員を上級武士と上層商人とすることによって軍事・流通両面の機能を向上させ、さらに城下の品位も併せもたせるとする藩側の意図が存在していたことを意味している。

17世紀後半以降になると金沢城下町の形成も一段落し、安定期の状況を呈するようになる。一方、藩政末期になると貨幣経済の浸透により生活基盤を求めた農民層が城下町へと流入して都市部に居住するようになり、都市部の人口が拡大の様相を見せる。これによりしだいに武家地と町屋の境界が曖昧になり、城下町の範囲も周辺の農村部へと拡大していく。藩政期当初に理想とされた職業・身分による城下町の階層構造はこの段階で失われていくこととなるのである。

(2) 金沢城下町遺跡の周知化

金沢城下町の地下に埋蔵される遺構と遺物は金沢の歴史と文化を示すにあたり特に重要なものであるとの考えから、平成23年度に金沢城を囲む惣構の内側と金沢城東側の重臣屋敷地の範囲が「金沢城下町遺跡」として周知化された。周知化範囲は約200haと広大であり、かつ既に周知化された遺跡も存在していたため、調査地点の呼称は以下の原則を適用している。当然のことながらこれは金沢城下町遺跡の範囲内においてのみ適用されるものである。

①中世以前の遺跡については名称を変更しない 例) 広坂遺跡

②近世を主とする既存の遺跡については「金沢城下町遺跡」の後ろに()書きで周知の遺跡名+「地区」を付す 例) 金沢城下町遺跡(安江町地区)

③周知化以降の新発見の遺跡については「金沢城下町遺跡」の後ろに()書きで町名と住居表示の街区番号を付す 例) 金沢城下町遺跡(安江町1番地点)

(3) 周辺の遺跡

本項では、金沢城下町遺跡内で過去に発掘調査が行われた箇所について概説する。「地区」及び「地点」呼称のものは前述した金沢城下町遺跡内の調査地点を示すもので、「金沢城下町遺跡」部分を省略したものとしてご理解いただきたい。

旧石器・縄文時代 金沢城下町周辺の最古の生活痕としては、金沢城石川門前土橋(a)および車橋調査区(b)から出土した旧石器時代後期の剥片石器がある。ただしこれは盛土層からの出土であり、他所からの搬入品であると考えられている。縄文時代の遺跡としては、金沢城下町からはやや離れるが、荻舞遺跡、犀川鉄橋遺跡など中期から晩期にかけての遺跡が周辺に分布している。

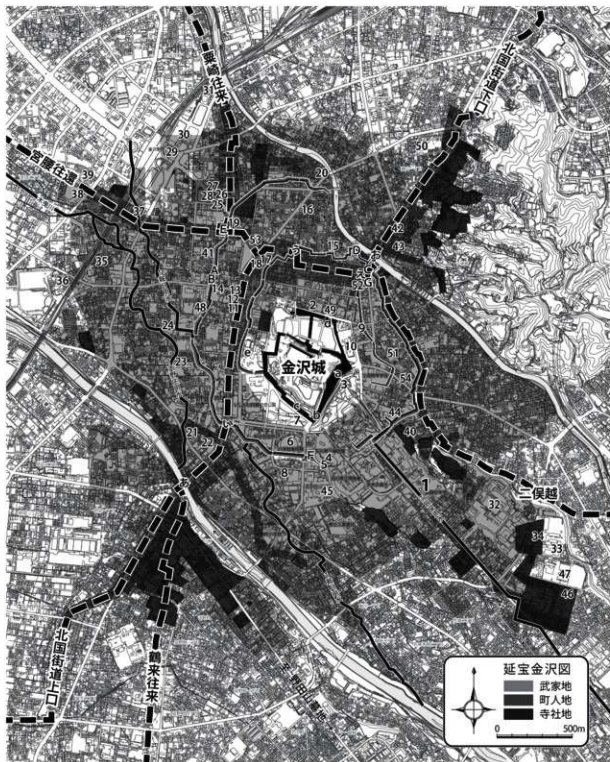
弥生・古墳時代 前田氏(長種系)屋敷跡地区(2)から弥生時代後期後半から終末期の墳丘墓が検出され、中心部に1基、その周囲に4基の木棺が検出されているほか、本町一丁目遺跡(25~28)、広坂遺跡(6)、高岡町地区(13・14)、醒ヶ井町遺跡(39)などで弥生時代後期~古墳時代前期の遺構が検出されている。

奈良・平安時代 金沢21世紀美術館建設に伴い発掘調査を行った広坂遺跡からは藤原京式と平城京式の古代瓦が大量に出土し、文献には残らない古代寺院の存在が想定されている。高岡町地区では当該期の遺構から半瓦当、奈良二彩、銅製帯金具などが出土しており、特異な性格を持つ遺跡と評価されている。その他、前田氏(長種系)屋敷跡地区からも当該期の遺構と遺物が検出されている。

中世 高岡町地区で当該期の薬研堀が検出されたほか、彦三町一丁目15番地点(16)から溝と遺物の検出が報告されている。戦国時代になると前述のとおり金沢城の場所に金沢御堂(尾山御坊)が築かれ、周囲には寺内町が形成されていたはずであるが、明確な遺構は現在のところ確認されていない。

近世 藩政期の金沢城下町の中心となる金沢城では、平成20年(2008)の国史跡指定を契機に、発掘調査の成果を基にした五十間長屋、菱櫓、橋爪門、河北門、玉泉院丸庭園、鼠多門などの復元・整備が行われている。金沢城下の防御の要であった惣構は現在、土居は盛土のほとんどを消失し、堀もその規模を縮小して水路として機能するのみであるが、平成20年(2008)の市史跡指定を皮切りに、惣構の確認調査が金沢市によって継続的に行われ、東内惣構跡枯木橋北地点(C)、同南地点(G)、西内惣構跡主計町地点(D)、西外惣構跡升形地点(E)の復元整備が実施されている。特に升形地点では城下町の出入口にあたる金石(宮腰)街道と西外惣構の交点に設けられた升形の土居と堀が復元されており、金沢城下町の往時の景観が再現されている。

金沢城下町では絵図等の比較により武家地と町人地(町屋)との区別が比較的容易である。前者の発掘調査としては、前田氏(長種系)屋敷跡地区や長氏屋敷跡地区(48)など万石以上の家臣の屋敷跡を始めとして、広坂遺跡、高岡町地区、丸の内7番地点(10)などの武家地、下本多町地区(8)や長田町遺跡(38)、穴水町遺跡(24)、醒ヶ井町遺跡などの下屋敷跡(第4章参照)などの発掘調査が行われている。その他、本町一丁目遺跡や昭和町遺跡(37)、瓢箪町遺跡(20)、東山一丁目遺跡(42)などの町人地のほか、経王寺遺跡(34)や久昌寺遺跡(31)などの寺院境内地の発掘調査が行われている。また、本多氏屋敷跡地区(4・5)では本多家当主の居屋敷である上屋敷の外構えに残る塀、門、道、石垣の詳細調査が行われ、市史跡に指定された後、整備・公開されている。



第4図 城下町復元図と調査された遺跡(S=1/25,000)

1. 飛梅町3番地点 2. 前田氏(昌輝系)屋敷跡地区 3. 兼六園江戸町推定地点 4・5. 本多氏屋敷跡地区 6・7. 広坂道跡 8. 下本多町地点
9. 兼六元町3番地点 10. 丸の内7番地点 11. 高岡町一ツ水堀跡地点 12. 高岡町3番地点 13・14. 高岡町地点 15. 彦三町一丁目8番地点
16. 彦三町一丁目15番地点 17. 青草町地点 18. 下堀町地点 19. 安江町地区 20. 瓢箪町道跡 21. 片町二丁目道跡(13番地点)
22. 片町二丁目道跡(5番地点) 23. 長町道跡 24. 穴水町道跡 25-28. 本町一丁目道跡 29. 本ノ新保道跡(7番丁地点) 30. 本ノ新保道跡
(安江町地点) 31. 久昌寺道跡 32・33. 宝町道跡 34. 経王寺道跡 35. 三社町道跡 36. 元菊町道跡 37. 昭和町道跡 38. 長田町道跡
39. 醒ヶ井町道跡 40. 東兼六町5番地区 41. 玉川町道跡 42. 東山一丁目道跡(3番地点) 43. 東山南水溜跡 44. 東兼六地点
45. 本多町三丁目地点 46. 小立野四丁目道跡 47. 小立野エミノマチ道跡 48. 長氏屋敷跡地区 49. 大手町3番地点 50. 森山二丁目道跡
51. 兼六元町7番地点 52. 尾張町1丁目7番地点 53. 安江町1番地点 54. 兼六元町15番地点
A. 西外惣構跡武蔵町地点 C. 東内惣構跡枯木橋北地点 D. 西内惣構跡主計町地点 E. 西外惣構跡升形地点 F. 西外惣構跡本多
町三丁目地点 G. 東内惣構跡枯木橋南地点 ……以上、地区・地点呼称分は金沢城下町道跡
a. 金沢城跡(石川門前上橋) b. 金沢城跡(車橋) c. 金沢城跡(宮守堀) d. 金沢城跡(新丸) e. 金沢城跡(金谷出丸)
あ. 犀川大橋 い. 香林坊橋 う. 袋町橋 え. 枯木橋 お. 浅野川大橋

第3章 遺構と遺物

第1節 発掘調査の概要

調査地点は金沢くらしの博物館の背後で紫錦台中学校運動場に面しており、その造成土が調査区まで連続している。基本層序は現況 GL (標高 55.1m 前後) から約 0.3m 下までが運動場造成土で、その下に近代整地層が約 0.3m 前後の厚さで展開する。近代整地層は明確な土色の差異は認められず、大正から昭和初期の瓦を含む近世遺物が礫とともに混入することから昭和初期の成立を想定しているが、明治晩期から昭和 40 年代にかけて中学校の校舎の増築と撤去が繰り返されており (第 4 章参照)、中学校敷地全体が同じ様相であるとは限らない。近代整地層の直下には明褐色粘質土の地山が展開し、地山直上の標高 54.5m 前後で近世の遺構が検出される。本調査区において近世以前の整地層や包含層は検出されないことから、近代以降、具体的には旧制中学校用地として買収された明治 31 年以降の造成が地山直上にまで及んでいると考えられる。調査区の平面形は長方形で、長辺が約 45° 西に傾く (第 8 図)。



第5図 基本層序

第2節 遺構と遺物

本節では、発掘調査において検出した遺構について報告する。発掘調査及び屋内整理時には遺構略称を用いており、本書でもその略称を踏襲する。

井戸 (SE)

SE01 (遺構: 第 10 図 遺物: 第 14 図) 調査区北東壁の北西寄りで検出。遺構の約半分が調査区外にあるが平面形は円形を呈すると考えられる。検出した最大径は 1.49m で断面形はほぼ垂直に落ちる円筒形。深さ約 1.2m まで掘削したが底面は確認されていない。埋土は暗褐色土で複数層に分けられるもののその差異は僅かで一時期に埋められたものと思われる。井戸枠は付属せずその掘方も確認されなかった。SK06 と接するが切り合い関係がないため本来は一連の遺構と考えられる。陶磁器片、いぶし瓦片などが出土するがその数は多くない。出土遺物から 18 世紀後半の廃絶と考えられる。

第 14 図 1 は軒平瓦の瓦当で表面が暗灰色のいぶし瓦である。瓦当正面に窓を設け、その中心に花芯と 5 つの花弁を持つ梅鉢文と、その横におそらく 3 本の葉からなる唐草文を配する。梅鉢文は花芯・花弁ともに円形だが花芯がやや小さい。また、梅鉢文に最も近い唐草は 2 枚の葉が造形されている。前田家 (長種系) は梅鉢文を家紋として使用しており、その下屋敷跡である本調査区から同家の家紋が入る軒平瓦が出土していることは、調査地の居住者の性格を示すものとして注目される。2・3 は灯明皿でいずれも 18 世紀後半のものか。

SE02 (遺構: 第 10 図 遺物: 第 14 図) 調査区中央北西寄りで検出。井戸の内径は約 0.8m のほぼ円形で、検出面から約 0.3m まで径 1.6m 弱の円形の掘方がテラス状に残る。これは井戸枠を設置した際の掘方と思われ、井戸枠は検出時点で既に抜き取られて裏込めと思われる石材のみ残存する。井戸本体の断面形はほぼ垂直に落ちる円筒形で、深さ約 1.5m まで掘削したが底面は確認されていない。埋土は暗灰色砂質土の単一層で、近世遺物も定量混入するが、ガラスやプラスチック、被覆銅線、ネジ締め錠の部品、昭和初期の棧瓦などの近代遺物が混入しており、廃絶は昭和期と考えられる⁽¹⁾。

第14図4は袖棧瓦、5は棧瓦である。いずれもSE02の埋土の浅いところから出土したもので、井戸の廃棄時に投棄されたものと見られる。胎土は橙色で砂粒が多く、光沢のある黒色釉を両面にかける。能登地方の生産で、時期は昭和初期。6は用途不明石製品の破片でし字状の加工が見て取れる。**SE03（遺構：第10図 遺物：第14図）** 調査区の北端で検出。円形の石組を持つ井戸であるが遺構の約半分が調査区外にある。長辺30cm前後の自然石を放射状に並べて石組みの井戸枠とするが、残存するのは下から2段目までである。石材は面取りなどの加工は行われず、積み方もやや粗い印象がある。石組の堀方は径約1.76mの断面皿形で埋土は暗褐色粘質土。井戸本体の平面形は径約0.9mの円形に復元され、断面形はほぼ垂直に落ちる円筒形を呈し、埋土は暗褐色粘質土で石組堀方とよく似る。深さ約1.5mまで掘削したが底面は確認されていない。定量の近世陶磁器のほか、近代瓦やガラス片などの近代遺物が混入しており、廃絶は昭和期と考えられる。

第14図7は屋根の棟の最上段に乘せる雁振瓦の破片である。胎土は赤褐色砂粒が多く、黒色釉を上面にかける。能登地方の生産で、昭和初期のものである。

土坑（SK）

SK01（遺構：第12図 遺物：第15-20図） 調査区中央東よりで検出。平面形は長辺3.44m、短辺1.82mの隅丸長方形で、最大深さは1.49mを測る。底面のほぼ中央に仕切り状の凸部があり北と南を分けている。凸部の検出が掘削の最終段階であったため、長辺方向の土層断面の確認に至らず、遺構の北側の堆積状況は確認できていない。隣接するSK11には切られているがSK15・16とは切り合いがなく、時期を同じくした廃絶と思われる。出土遺物は近世陶磁器類を主体とするが、北側の底面近くでは多数の腐食木製品、南側の底面近くでは腐食したタケノコ十数点が出土しており、不要品を廃棄した状況を見て取れる。遺物は19世紀代のものを中心に出土しており、遺構の年代も当該期を想定したい。

第15図9は外面に若松、10は梅を描く。11・12は蓋物の蓋と身のセットで、いずれも外面に流水文を隙間なく入れる。両者はセット関係にある。13の磁器碗は外面に鳥、見込に松竹梅を入れ、断面に漆継の痕跡がある。14の磁器碗の外面は3箇所の窓の中に山水図を描き、見込は岩波。18世紀後半代か。15は久谷産の磁器碗で外面に竹と雀を描く。見込は「若」か。一部に被熱痕がある。16のそば猪口は外面に薊、見込は手書き五弁花、高台内は渦福。18世紀中頃か。17は磁器蓋で外面に梅を色絵で描き、把手は中心からややずれて付く。18の磁器皿は蛇目凹型高台で口縁を輪花に作り、内面に草花文、外面に唐草文を描く。20の磁器皿は厚い底部から体部が緩く立ち上がり、見込は蛇目軸刺で漆継痕がある。体部内面は唐草文。21は須佐産陶器鉢で見込に目跡、高台内にノミ跡が残る。24は火鉢で足1箇所が残存するがもとは三足であろう。外面には赤漆を塗る。25は小型の土師器皿で型作りの品。19世紀代のものであろう。26はミニチュアの鬼瓦、27は土製円盤の欠片である。28は銅製の板状金具で穿孔が1箇所ある。同形の金具がもう1点出土している。第20図109は板状の部材で片面が黒漆塗り。穿孔が1箇所あり、内部に木釘が残存する。他材を結合するためのものであろう。110も109と同様の部材で片面が黒漆塗り。直接接合しないものの、漆塗りや素地の状況から109と同一個体と思われる。漆を塗らない面には縦材が接合していた痕跡があり、元は箱状の道具であった可能性が高い。端部の穿孔は縦材を結合するためのものであろう。111は厚みのある部材を刳り抜いて槽状に作る木製品の一部分である。全体的に風化が進む。112～114は曲物の蓋である。112と113は板材の一枚物で、112の表面には焼印が2箇所あり、一つは小判型の枠内に「御用」、もう一つは分銅型の枠内に「八重屋」と入れる。同判のものが安江町遺跡、本ノ新保遺跡から出土している²²。全体的に風化が進む。114は板材を引き合わせて作る蓋の一部で、接合面には穿孔が2箇所あり、双方とも内部に木釘が残存する。部材の断面に開けた穴に木釘を入れ、部材同士を結合させる構造であ

る。115は縦長の板材で用途は不明。風化が進み細かい調整は判然としにくい。

SK02 (遺構: 第11図 遺物: 第16図) 調査区東寄りで検出した長軸1.02m、短軸0.85mの卵形の土坑。深さは0.26mを測る。断面形は椀形で埋土は暗褐色粘質土の単一層。隣接するSK03とは切り合い関係がなく同時期の廃絶である。出土遺物はSK02と03の境界から出土した第16図29の美濃産陶器皿を含め陶磁器細片数点のみ。

SK03 (遺構: 第11図 遺物: 第16図) 調査区東寄りで検出。平面形は径1.08mのほぼ円形で深さは0.5mを測る。断面形は椀形で埋土は暗褐色粘質土の単一層。隣接するSK02とは切り合い関係がない。また、SK07出土遺物と接合する磁器碗が出土している(第16図30)。したがって、SK02・03・07は同時期の廃絶と見ることができる。

第16図30は京・信楽産の陶器碗で内外面に草花文を色絵で描く。SK07出土片と接合する。31はミニチュアの片口鉢で内面と外面上半に透明釉を施軸する。32は独楽。

SK04 (遺構: 第11図 遺物: 第16図) 調査区の北端で検出。平面形は長軸1.24m、短軸1.05mの楕円形で深さ0.6m。断面形は箱形で埋土は縦方向の4層に分かれ小礫が多く混入する。遺構からは18世紀後半～19世紀初頭の遺物が出土し、土師器皿が多く含まれるのが特徴的である。隣接するSK09に切られているが、出土遺物から両者は近い年代の遺構と見られる。

第16図33～40は土師器皿である。大小2系統に分かれるが、総じて平坦な底部から体部が折れ気味に開くように立ち上がり、内面に凹線を持つものも多い。18世紀後半から19世紀初頭にかけてのものであろう。

SK05 (遺構: 第11図) 調査区の北西壁の南東端で検出した、長辺2.21m、短辺0.89mの不定形土坑。遺構は調査区外へと続く。深さは最大で0.32m、複数の浅い土坑が連続するような形状である。埋土は黒褐色粘質土が主体で3層に分けられる。隣接するSK10を切っている。陶器細片4点、18世紀代の土師器皿片1点が出土している。

SK06 (遺構: 第10図) 調査区北東壁の北西寄り、SE01に接する形で検出。長辺0.66m、短辺0.48m、深さ0.41mの平面方形・断面箱形の土坑。埋土は暗褐色粘質土の単一層で、SE01と切り合い関係が見られないため、井戸の一部である可能性が高い。遺物は陶磁器細片2点、土師器皿細片5点のみ。

SK07 (遺物: 第16図) 調査区西寄り、SE02とSK02の間に位置する、長軸1.86m、短軸1.2mの楕円形の土坑で深さは0.19mと浅めである。底面外周に小さい窪みが連続する傾向にある。埋土は黒褐色～褐色の粘質土が薄く水平に4～5層に退席する。SE02に切られ、SK10を切っている。また、前述のとおり、SK02・03と廃絶時期を同じくする。出土遺物は図示したもののほか、陶磁器細片3点・土師器皿細片10点が出土している。第16図41は磁器蓋物の身でおそらく香合であろう。外面に折松葉と松笠を2種類の赤で色絵する。

SK08 (遺構: 第9図) 調査区南西壁の北端で検出。遺構の大半は調査区外にあり、検出できたのは一部のみである。検出した断面形は椀形で深さは0.33mを測る。陶磁器細片6点が出土したのみ。

SK09 (遺構: 第11図) 調査区の北端で検出。平面形は径0.7mのほぼ円形で深さは0.39mを測る。断面形は椀形だが底面でやや乱れる。埋土は黒褐色粘質土で4層に分けられるがその差異はわずかである。出土遺物は陶器片・土師器皿片各1点で、後者は18世紀末～19世紀初頭のもの。遺物数は少ないが遺構の年代も同時期と見ておきたい。隣接するSK04を切るが遺物の年代観は類似する。

SK10 (遺物: 第16図) 調査区北西端、SK07の北に隣接する。径約0.6mのほぼ円形の土坑で、断面形は椀形に近いが底面は不整形である。深さは0.41mを測り、埋土は黒褐色粘質土のほぼ単一層。隣接するSK05とSK07に切られている。出土遺物は第16図43の青磁皿のみである。

SK11(遺構:第12図 遺物:第17・18図) 調査区の東寄り、SK01を切る土坑で、長軸1.29m、短軸1.12m、深さ0.86m。平面形はほぼ円形、断面形は円筒形だが検出面近くは皿形に開く。埋土は暗褐色粘質土の単一層。出土遺物量は比較的多く、礫や炭とともに19世紀代の近世遺物が混入する。

第17図53の磁器小坏の外面には人物と杜牧の漢詩『山行』の一節「遠上寒山石径斜」を書く。55は合子の身で外面に青磁釉を施軸するが発色は薄い。内面には朱が付着する。56の磁器角皿は型押しで見込にねじ梅、体部内面に波頭を入れる。焼継痕、高台内に焼継印、被熱痕がある。57の磁器皿は形打ちで全形を24弁の輪花に作り、見込に16弁の菊花を3箇所に入れる。同形同意匠の別個体1点が同一遺構から出土している。60・61は瀬戸産磁器急須の蓋と身のセットで、両者ともに草花文(牡丹か)を描く。62は瀬戸産の急須の身と思われる。外面は窓の中に梅や松を描き、窓間を唐草文で埋める。体部は14角形に作り、焼継痕がある。63は磁器の火入れで口縁端部に打ち欠き、蛇目凹型高台の内部に墨痕がある。64は磁器の水注で外面全体と内面の下半に青磁釉をかける。側面には柳下の仙人と童子の意匠を型押しする。65は京都・信楽産の陶器碗で外面に松葉の鉄絵。18世紀末～19世紀初頭のものか。66は行灯皿で外面は透明釉の上に白泥を重ねがけする。67は焜炉とした。体部を大きく開口し、その両脇に穿孔3個を逆三角形に配する。口縁部内面に器具を乗せる突起があり、接地面には「マコ」の墨書がある。五徳のように使用したものであろう。第18図68～71はミニチュア製品。72は凝灰岩製の石製品で、立方体の内部を削り抜いて箱状に作る。

SK12(遺構:第9図 遺物:第16図) 調査区南西壁の南東端で検出した土坑。平面形・断面形ともに不整形で、南西壁側へ向かって落ち込み、底面(特に遺構の縁)には凹凸が多く見られる。調査区南西壁際で石垣状の石積みが1列検出されている。石積みは最下段の3個と2段目の1個が残存し、幅30cm・長さ40cm前後の自然石が用いられている。方位はほぼ南北軸に乗ると見られ、剖面もしくは自然の平坦面を東側に向ける。石積みの外側には裏込め状の栗石があり、それに接して別遺構SK14がある。埋土は薄い層が水平に連続して堆積し、大小礫や炭が多く混じる中に19世紀代の近世遺物が出土する。検出範囲が限定されるため遺構の性格の判別は困難だが、水溜状もしくは池状の施設を想定したい。遺構の縁の凹凸は樹木根の痕跡の可能性もある。

第16図44・45はいずれも久谷産の磁器。44の皿は見込に寿字を大きく入れる。46の磁器香炉は底部が蛇目凹型高台、見込に降灰がある。47の灯明受皿には4箇所の油痕が残る。

SK13(遺構:第11図 遺物:第16図) 調査区北東壁の南東端で検出。遺構の約半分が調査区外にあるが平面形は円形になると考えられる。検出した最大径は1.06mで深さは0.55m、断面形は碗形。埋土は黒褐色粘質土で地山小塊の混入の有無で2層に分けられる。出土遺物は少なく、第16図48のほか陶磁器細片が出土したのみである。

SK14(遺構:第9図 遺物:第18・19・20図) 調査区南西壁の中央やや南東よりで検出したが遺構の大部分が調査区外にある。最大長は2.58mで断面形はほぼ垂直に落ちる円筒形。検出面から深さ約1.3mまで掘削したが底面は確認されていない。埋土は暗褐色粘質土の上層と黒褐色粘質土の下層の2層からなり、遺構面-1.0m付近から陶磁器類の出土が多くなり木製品も混入する。遺構面-1.3m付近で近代瓦片1点が出土しており、近代以降の廃絶の可能性があるが、遺物の主体は19世紀代である。隣接するSK12との切り合いは不明瞭で、あるいは同時期に埋め戻された可能性がある。

第18図73の磁器小坏は内面に美人画を色絵する。色絵は退色し銀色の発色となっている。78は肥前産のそば落口で口縁端部に口鏤、外面に山水図。79・80は紅皿。形打ち成形し外面を貝殻に似せ、口縁端部を平坦にする。79は内面にも貝殻状の文様を入れる。81の磁器鉢は体部を平面六角形に作り、各面とも外面に人物(童子と犬)、内面に紗綾形文や四方標文などを入れる。焼継痕がある。82の磁

器皿は底部と体部の境界が角張り、体部は外反する。見込に牡丹獅子を型押しし、呉須で墨入れする。86・87の陶器皿はいずれも見込に蛇目軸刺、体部内面に唐草を鉄絵で描く。90の陶器皿は口縁を8弁の輪花に作り、端部を玉縁状に折り返す。91は陶器の蓋でつまみを亀形に作り透明釉の上から白泥をかける。底部には糸切痕がある。第19図92は陶器鉢で球胴状の体部、外に折り返す口縁部を持つ。内面に残る4箇所の目跡には朱を差している。95はミニチュアの蓋か。外面に雲母粉が残存する。96の土人形は右片肌を脱ぐ男性立像である。第19図116は漆器碗である。口縁部と高台端部を欠損し、外面と高台内を黒漆塗り、内面を朱漆塗りとする。117は用途不明の漆器である。全体形状は円形を繋げた瓢箪型で器厚は薄く、全体に黒漆をかける。両端に径3mmの真鍮製の環を付け、あたかも眼鏡のような形状となっている。この真鍮環は漆塗布前に取り付けられている。瓢箪型の円形部は双方で微妙に形状が異なり完全な対象形ではない。片面の端部は面取りされ反対面の端部は角が立つことから表裏の区別があるものと思われ、別材を引き合わせていた可能性がある。118は容器の蓋である。片面を黒漆塗りとし、この面には平行2本の漆がかからない部分があり、それぞれに方形の穿孔があつてうち1箇所の内部には木釘が残存する。角材2本が桁状に取り付けて把手としたのだろう。114と同様、板材を引き合わせる構造で、断面には2箇所に穿孔がありいずれも木釘が残存する。119の下駄は断面逆台形で歯を差す切り込みが2箇所にあり。

SK15 (遺構: 第12図 遺物: 第16図) 調査区の中央やや東よりで検出した、長軸1.5m、短軸1.15mの平面卵形の土坑。深さは0.45mの皿形で暗褐色粘質土の単一層。隣接するSK01・16との切り合いはなく、同時期に埋め戻された可能性が高い。

第16図49の陶器碗は外面に色絵を施すが退色が激しい。高台内に「キ」と小さく墨書する。50の磁器鉢は全体を8弁の輪花に作り、口縁を口鏤とする。見込には登壇図を大迫力に描く。51の陶器鉢は底部に短い足が付く。SK16出土破片と接合している。

SK16 (遺構: 第12図 遺物: 第19図) 調査区の中央やや東よりで検出した、長辺1.07m、短辺0.47mの隅丸長方形の土坑。深さは0.41mで断面は碗形。埋土はSK15と同じ暗褐色粘質土の単一層で、隣接するSK01・15との切り合いはない。第19図98の紅皿外面には梅花の型押がある。99は器高の低い磁器皿で見込に山水図を描く。

SK17 (遺構: 第9図 遺物: 第19図) 調査区南西壁のやや北西、SK08とSK18の間に位置する。遺構の一部のみの検出で、最大長は1.49m。断面形は上部が内側に張り出す壺形で、検出面から深さ約1.2mまで掘削したが底面は確認されていない。埋土は黒褐色粘質土の単一層で、下位では炭や白灰が混じる。南東に隣接するSK18を切る。出土遺物は比較的多く18世紀後半の陶磁器類が中心。

第19図100の磁器筒碗は外面に松、高台周りに鋸歯文、見込に手描き五弁花。18世紀後半。101の磁器皿は蛇目高台、内面に草花文、外面に唐草文。同形同意匠の別個体がSK01から出土している(第15図18)。102の陶器碗は鉄軸の上から灰軸を2度かけし、さらに白泥で火燵宝珠を絵付けする。

SK18 (遺構: 第9図) 調査区南西壁のほぼ中央で検出。SK17とSK14の間に位置し、双方に切られているため遺構の形状は不明。埋土は黒褐色と褐色の粘質土が水平に3層重なる。出土遺物は19世紀代の陶磁器・土師器皿の細片十数点のみである。

SK19 (遺構: 第13図) 調査区南東壁のほぼ中央で検出。長辺1.15m、短辺0.48mの楕円形で深さは0.14mと浅い。断面形は碗形に近いが底面に凹凸が多い。埋土は暗褐色粘質土の単層。隣接するSK20に切られている。同一個体の陶器破片3点が出土している。

SK20 (遺構: 第13図) 調査区南東壁のほぼ中央で検出。遺構の一部が調査区外へ延びており、検出範囲は長軸0.79m、短軸0.7mの楕円形。深さは0.16mと浅く、断面形は不定形で底面に凹凸が多い。

埋土は黒褐色と褐色の粘質土で2層に分けられる。隣接するSK19を切る。土師質土器細片11点と磁器・陶器細片各1点が出土しており近世の廃絶と見られるが正確な年代は判然としない。

SK21（遺構：第11図） 調査区の北端で検出。遺構の大半が調査区外にあり、検出したのは遺構の一部のみである。検出した最大長は0.65mで深さは0.22m、断面形は箱形だが壁面近くでさらに落ち込むようである。埋土は暗褐色粘質土が混じる明黄褐色粘質土の単一層。遺物は出土していない。

溝・小穴（SD・P）・近代整地層

SD01（遺構：第10図 遺物：第14図）

調査区北東壁の北西寄り、SE01に接する形で検出。長さ0.95m、幅0.43m、深さ0.14mと小規模で、小規模土坑の連続と見ることもできる。SK06と接するが切り合いは存在せず、SK06と同様にSE01に付属する何らかの施設跡の可能性はある。SD01からは第14図8の陶器碗を含めて陶磁器細片が計3点出土したのみである。

P01 調査区中央西よりで検出。径約0.6mの円形で、深さは0.22m、断面形は箱形。

P02 SK18に北接する。径約0.22mの円形で、深さは0.29m、断面形は円錐形。土師質土器細片1点が出土している。

P03（遺構：第13図） SK20に北接する。径約0.26mの円形で、深さは0.42m、断面形は円筒形。埋土は黒褐色粘質土を中心に褐色～明褐色粘質土が混入する。

近代整地層（遺物：第19図） 第19図103は肥前産磁器碗で厚い底部から体部が立ち上がり口縁は外反する。104は粘板岩製の硯で、全面に墨痕があり、底面に「43」と読める刻書がある。旧制中学校時代のものか。105の棧瓦は両面に黒色釉をかける。胎土は赤褐色で、白色の胎土が薄く層をなす。現小松市八幡付近の瓦の特徴で、時期は大正から昭和初期。旧制中学校の付属建物に葺かれていたものか。

第3節 補強バットレス設置箇所立会調査

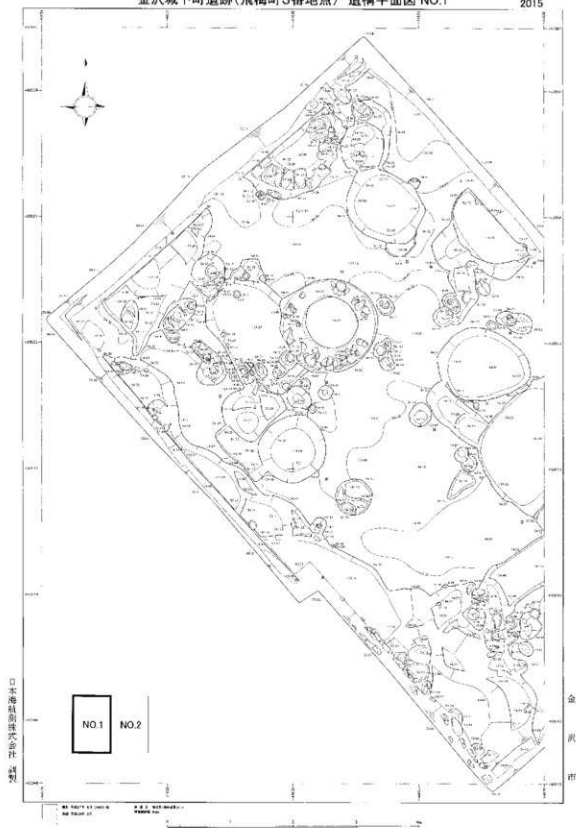
旧石川県第二中学校本館のリニューアル工事の目的の一つとして既存建物の耐震化が含まれており、その方法として補強バットレス設置が採用された。バットレス設置箇所には2,000×2,500×650mmの基礎が埋設されるため、本来ならば発掘調査の対象となり得るが、面積が狭小であること、既存建物に近接すること、などから本発掘調査の実施は困難と判断し、施工時の立会調査として対応した。立会調査は平成27年11月13日に実施した。

立会調査では工事での予定深度であるGL-65cmまで掘削を行い、GL-50cmで遺構面を検出した。遺構面より上位はグラウンド造成土及び近代整地層となっており、本発掘調査の基本層序と一致する結果となった。遺構面からは複数の遺構の一部を確認したが、範囲が狭小なため遺構の全体形等は不明である。立会調査時の出土遺物は近世遺物が大部分であったがその量は多くない。

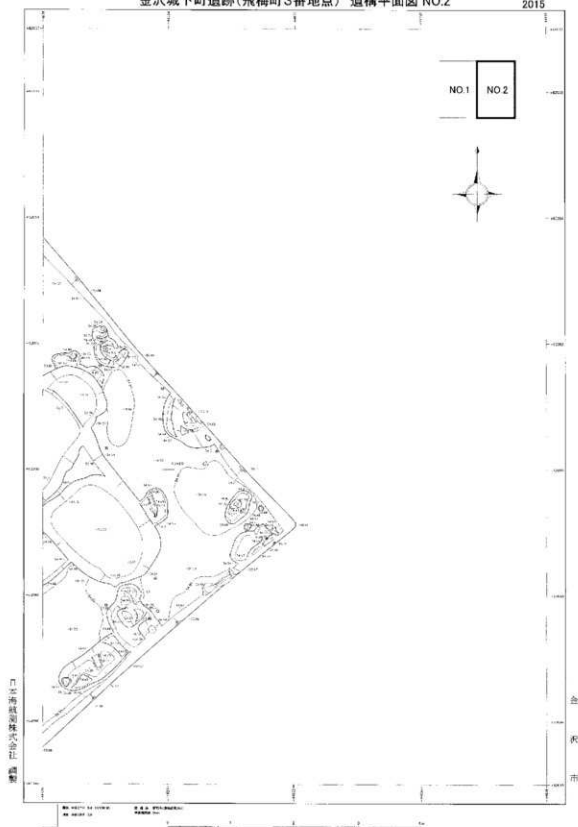
第19図106～108は立会調査時に出土した遺物の一部である。いずれも肥前産の磁器碗で、106は口縁端部が外反し、外面に山水図を描く。107の筒碗は蛇目凹型高台を持ち見込に手描き五弁花を入れる。108も106と同様の器形で、外面に花文を染付する。

また、バットレス設置箇所の立会調査と同時に、既存建物左翼棟西側出入口に設置するスロープ部分の立会調査も実施したが、こちらは工事掘削深度が遺構面まで到達しなかったため遺構等は確認されなかった。

(1) 昭和48年ごろに本館後背の講堂等が一括撤去されており（第4章参照）、あるいはその際に井戸を埋めたものか。
(2) 金沢市文化財紀要130『安江町遺跡』金沢市、1997／金沢市文化財紀要219『木ノ新保遺跡』金沢市、2005

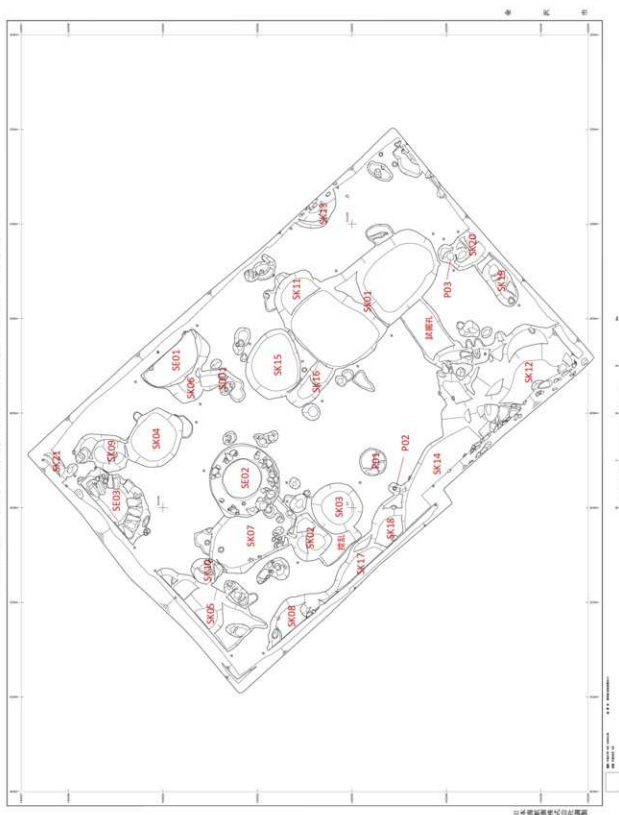


第6図 遺構平面図(1) (S=1/60)



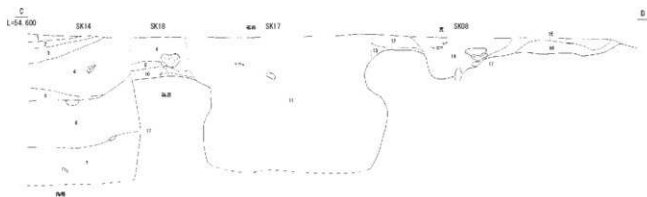
第7図 遺構平面図(2) (S=1/60)

金沢城下町遺跡(飛梅町3番地点) 遺構図

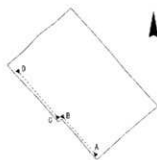




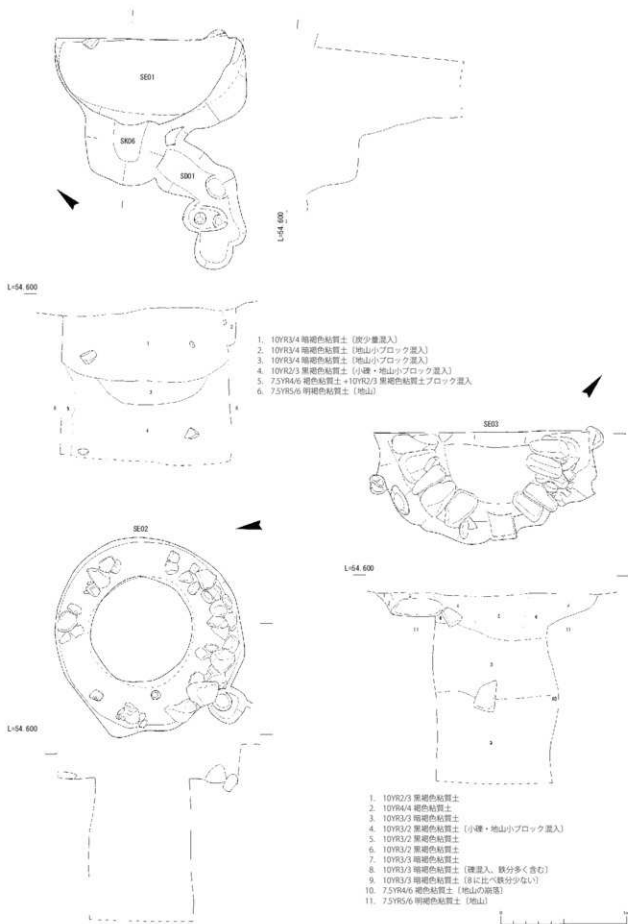
1. 25Y7/4 浅黄色砂質土 (運動場土)
2. 25Y4/6 オリーブ褐色砂質土 (運動場調整地土)
3. 10Y2/1 栗色粘質土 + 10YR3/3 暗褐色粘質土ブロック混入 (運動場調整地土)
4. 10YR3/3 暗褐色粘質土 (地山ブロック多く混入)
5. 10YR3/3 暗褐色粘質土 (灰・地山小ブロック少量混入)
6. 10YR3/3 暗褐色粘質土 (地山小ブロック混入)
7. 10YR3/3 暗褐色粘質土
8. 10YR5/6 黄褐色粘質土 + 10YR3/3 暗褐色粘質土ブロック混入
9. 10YR3/3 暗褐色粘質土 (地山小ブロック少量混入)
10. 10YR3/3 暗褐色粘質土 (地山大ブロック多く混入)
11. 10YR4/4 褐色砂質土
12. 10YR3/3 暗褐色粘質土
13. 75YR4/6 栗色粘質土 + 10YR3/3 暗褐色粘質土小ブロック混入
14. 25Y3/2 栗褐色粘質土
15. 10YR3/3 暗褐色粘質土 (碑・礎混入)
16. 10YR3/3 暗褐色粘質土 (地山ブロック多く混入)
17. 10YR3/3 暗褐色粘質土 (地山小ブロック少量混入、やや砂質)
18. 10YR4/4 暗褐色粘質土 (非常に堅く締まる、鉄分多く含む)
19. 10YR6/6 明黄褐色粘質土 + 10YR3/2 栗褐色粘質土小ブロック混入
20. 75YR5/4 に近い褐色粘質土 + 10YR3/2 栗褐色粘質土ブロック多く混入
21. 75YR5/6 明褐色粘質土 (地山)

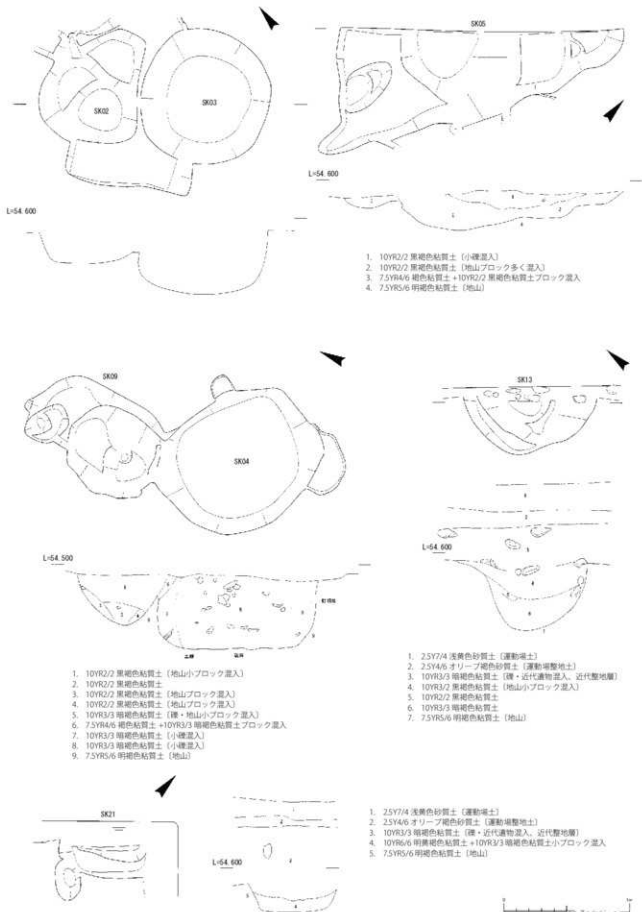


1. 10YR3/3 暗褐色粘質土 (地山小ブロック多く混入)
2. 10YR3/3 暗褐色粘質土
3. 10YR5/6 黄褐色粘質土 + 10YR3/3 暗褐色粘質土ブロック混入
4. 10YR3/3 暗褐色粘質土 (地山小ブロック少量混入)
5. 10YR4/4 褐色砂質土
6. 10YR3/3 暗褐色粘質土
7. 25Y3/2 栗褐色粘質土
8. 10YR3/2 栗褐色粘質土 (地山小ブロック少量混入)
9. 10YR4/6 褐色粘質土 + 10YR3/2 栗褐色粘質土ブロック混入
10. 10YR3/2 栗褐色粘質土 (地山ブロック混入)
11. 10YR3/2 栗褐色粘質土 (灰・小礎混入)
12. 10YR3/3 暗褐色粘質土
13. 75YR3/3 暗褐色粘質土 + 10YR3/3 暗褐色粘質土ブロック混入
14. 10YR3/3 暗褐色粘質土 (地山小ブロック混入)
15. 10YR3/3 暗褐色粘質土 (地山ブロック少量混入)
16. 10YR4/6 褐色粘質土 + 10YR3/2 栗褐色粘質土ブロック混入
17. 75YR5/6 明褐色粘質土 (地山)

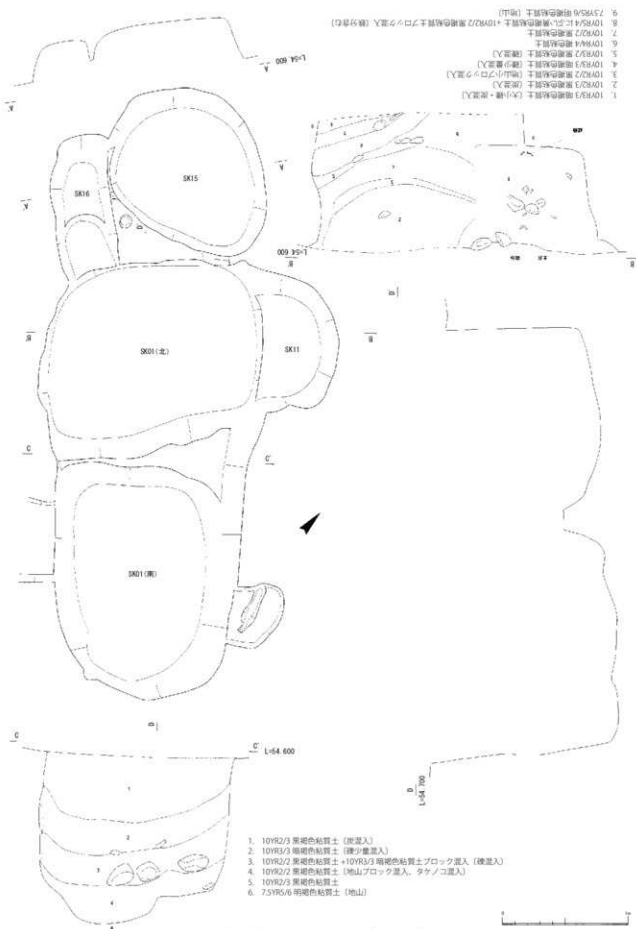


第9図 調査区南西發土層図(S=1/30)

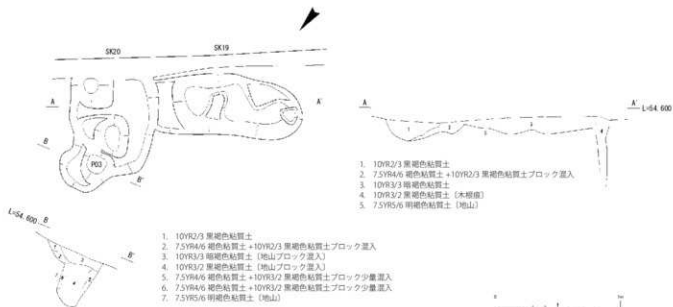




第11図 SK02・03・04・05・09・13・21(S=1/30)



第12図 SK01・11・15・16(S=1/30)

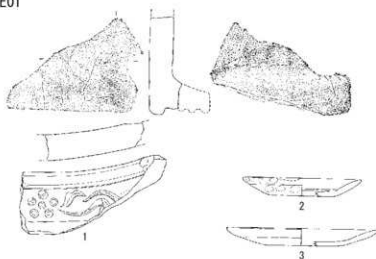


第13図 SK19・20、P03(S=1/30)

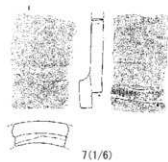
第1表 遺構観察表

遺構名	平面形	断面形	長辺 (m)	短辺 (m)	深さ (m)	特記	図面番号	
							遺構	遺物
井戸 (SE)								
SE01	円形	円筒形	1.49	(0.68)	未検出	梅鉢帯草文軒平瓦出土 SK06と切り合いなし	第10図	第14図
SE02	円形	上部：輪形 下部：円筒形	幅方：1.58 内径：0.80	幅方：1.52 内径：0.84	未検出	石船の裏込石が残存 裏船は近世物	第10図	第14図
SE03	円形	上部：皿形 下部：円筒形	幅方：1.76 内径：0.90	(幅方：0.89) (内径：0.66)	未検出	石船1段残存 裏船は近代以降	第10図	第14図
土坑 (SK)								
SK01	長方形	隅丸方形	3.44	1.82	1.49		第12図	第15図 第20図
SK02	圓形	桶型	1.02	0.85	0.26		第11図	第16図
SK03	円形	桶型	1.08	1.07	0.5		第11図	第16図
SK04	楕円形	桶形	1.24	1.05	0.6		第11図	第16図
SK05	不整形	皿形	2.21	0.89	0.32		第11図	第16図
SK06	方形	桶形	0.66	0.48	0.41	SE01と切り合いなし	第10図	—
SK07	楕円形	皿形	1.86	1.20	0.19		—	第16図
SK08	楕円形?	桶型	(1.67)	(0.58)	0.33		第9図	—
SK09	円形	桶型	0.70	0.69	0.39		第11図	—
SK10	円形	不整形	0.60	0.57	0.41		—	第16図
SK11	円形	上部：皿形 下部：円筒形	1.29	1.12	0.86	SK01を切る	第12図	第17図 第18図
SK12	不整形	不整形	(2.57)	(2.03)	0.7	SK14と切り合いなし	第9図	第16図
SK13	円形?	桶型	1.06	(0.46)	0.55		第11図	第16図
SK14	楕円形?	円筒形	(2.58)	(1.01)	未検出	SK12と切り合いなし	第9図	第18図 第19図 第20図
SK15	圓形	皿形	1.5	1.15	0.45		第12図	第16図
SK16	長方形	桶型	1.07	0.47	0.41		第12図	第19図
SK17	不明	筒形	(1.49)	(0.40)	未検出		第9図	第19図
SK18	不明	不明	(0.81)	(0.43)	0.31		第9図	—
SK19	楕円形	不整形	1.15	0.48	0.14		第13図	—
SK20	楕円形	不整形	(0.79)	0.70	0.16		第13図	—
SK21	長方形?	桶形	(0.65)	(0.30)	0.22		第11図	—
溝 (SD)								
SD01	弧状	桶型	0.95	0.43	0.14		第10図	第14図
小穴 (P)								
P01	円形	皿形	0.59	0.58	0.08		—	—
P02	円形	円筒形	0.22	0.24	0.29		—	—
P03	円形	円筒形	0.27	0.26	0.42		第13図	—

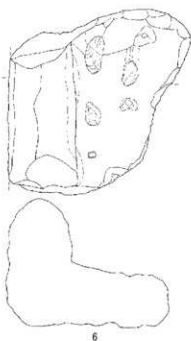
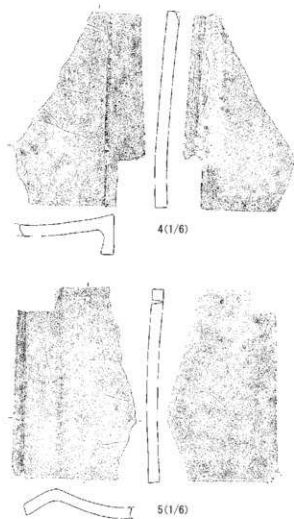
SE01



SE03



SE02



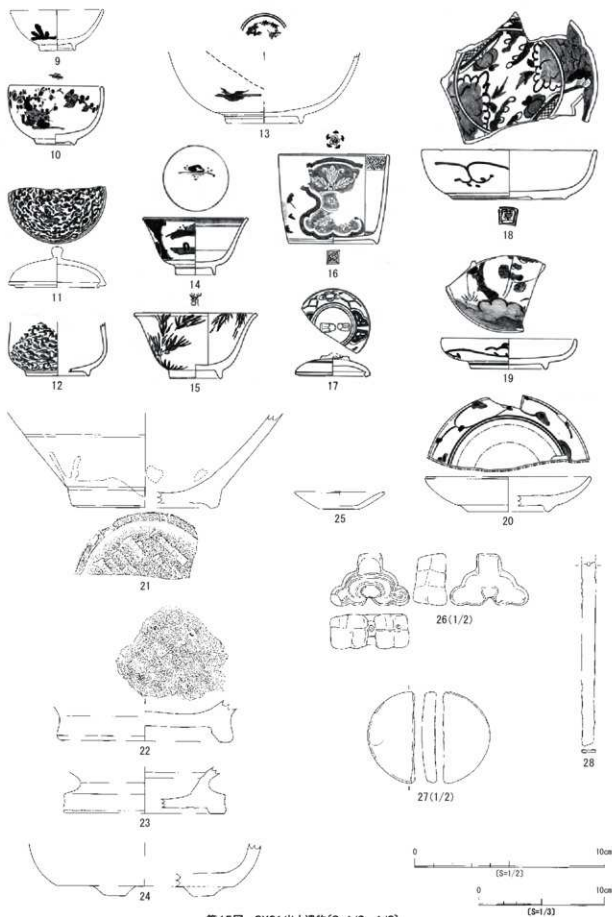
SD01



第14図 SE01・02・03、SD01出土遺物(S=1/3、1/6)



SK01



第15図 SK01出土遺物(S=1/2、1/3)

SK02・03



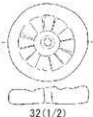
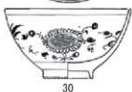
SK07



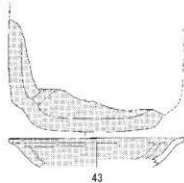
SK04



SK03



SK10



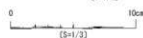
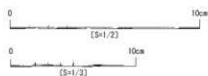
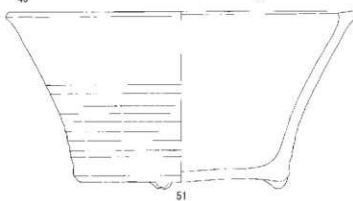
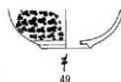
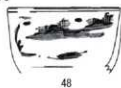
SK15



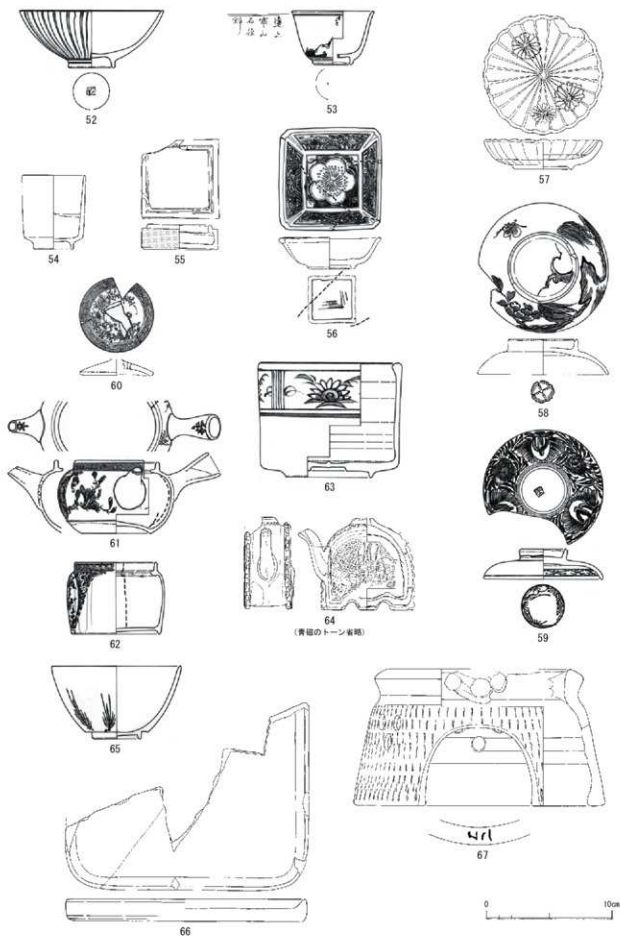
SK12



SK13

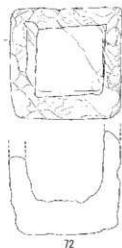
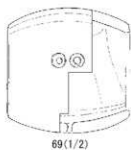


第16図 SK02・03・04・07・10・12・13・15出土遺物[S=1/2, 1/3]

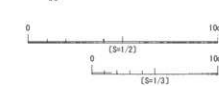
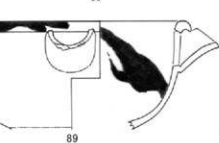
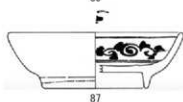
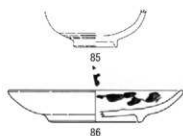
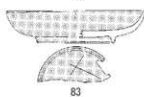
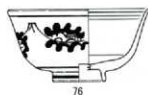


第17図 SK11出土遺物(S=1/3)

SK11

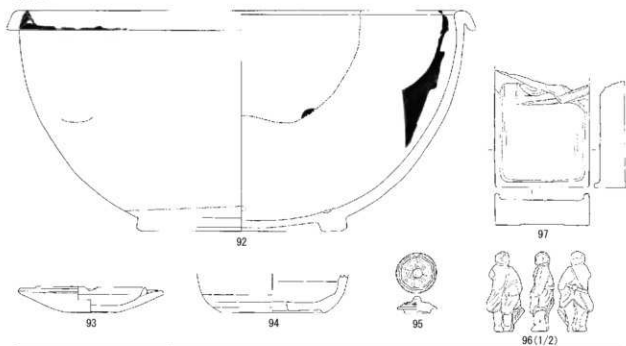


SK14



第18回 SK11・14出土遺物(S=1/2、1/3)

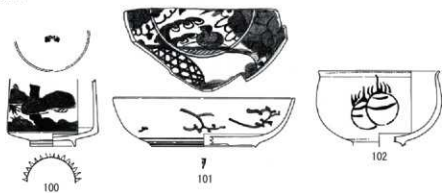
SK14



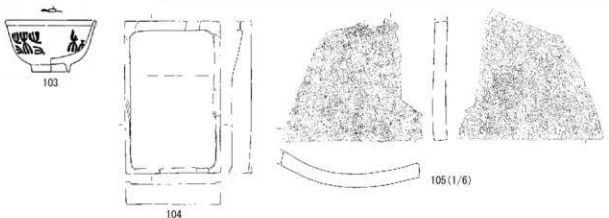
SK16



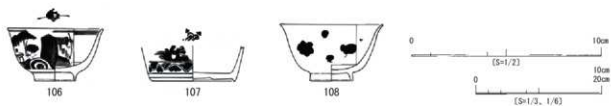
SK17



整地層



立会調査

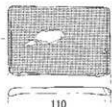


第19図 SK14・16・17出土遺物(S=1/2、1/3、1/6)

SK01



109



110



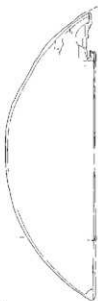
111



112

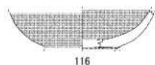


113

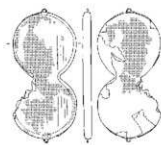


114

SK14



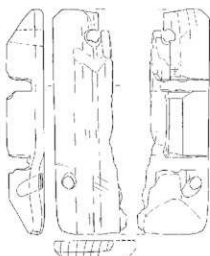
116



117



118



119



115



第20図 SK01・14出土遺物(S=1/3)

第2表 陶磁器類・土製品觀察表

区	番号	通稱	種類	材質	法番				通存	輪筆	施付	胎土色調	産地	備考	実測
					a	b	c	d							
14	2	SE01	土師器皿	土器	94	54	14		□ 3/12			10YR8/2 灰白	在地	灯芯油燭 2 箇所残	T15
	3	SE01	土師器皿	土器	120	72	14		□ 2/12			10YR8/3 浅黄褐色	在地		T16
	8	SD01	甕	陶器		45	(18)		底 7/12	反粘		10YR8/3 浅黄褐色	肥前		T14
	9	SK01	甕	磁器	74	29	33		底 6/12	透明釉	染付	N9/0 白	肥前		A12
	10	SK01	甕	磁器	75	31	47	76	底 12/12	透明釉	染付	N9/0 白	肥前	高台内火ぶくれ	A20
15	11	SK01	甕	磁器	78	9	32	66	□ 6/12	透明釉	染付	N9/0 白	肥前	12 とセット	A15
	12	SK01	甕物	磁器		50	(42)	98	底 4/12	透明釉	染付	N9/0 白	肥前	11 とセット	A16
	13	SK01	甕	磁器		60	(57)		底 4/12	透明釉	染付	N9/0 白	肥前	漆継	A13
	14	SK01	甕	磁器	84	32	45		底 12/12	透明釉	染付	N9/0 白	肥前		A18
	15	SK01	甕	磁器	98	42	52		□ 9/12	透明釉	染付	N9/0 白	久谷	見込縁有「西」 全面貫入 二次焼成	A10
	16	SK01	鉢口	磁器	88	71	71		底 7/12	透明釉	色絵	N9/0 白	肥前	色絵 (赤・金・緑・黒) 高台内縁有「西」	A19
	17	SK01	甕	磁器	59	24	(16)	56	□ 7/12	透明釉	色絵	N9/0 白		色絵 (赤・黄・緑・黒)	A14
	18	SK01	皿	磁器	140	90	40		底 9/12	透明釉	染付	N9/0 白	肥前	髷付 9 弁 蛇目彫製高台 高台内縁有	A8
	19	SK01	皿	磁器	108	61	24		底 4/12	透明釉	染付	N9/0 白	肥前		A11
	20	SK01	皿	磁器	132	66	28		底 4/12	透明釉	染付	N8/0 灰白	肥前	見込蛇目輪刺 漆継 底色が甘い	A9
	21	SK01	鉢	陶器		116	(75)		底 4/12	反粘		2.5YR/4 淡黄	清佐	高台内ノミ 内面に目取 2 箇所残	A1
	22	SK01	摩鉢	陶器		140	(34)		底 3/12			10R6/8 赤褐色	肥前	高台内「ノ」跡印 内面厚減	A4
	23	SK01	火鉢	陶器		130	(37)		底 2/12	緑釉		2.5YR/2 灰白	瀬戸・美濃	底面・内面に髷状痕	A3
	24	SK01	火鉢	土器		140	(43)		底 1/12			7.5YR7/4 に近い黄褐色	在地	外周赤漆 足 1 箇所残	A2
	25	SK01	土師器皿	土器	72	30	14		□ 4/12			10YR8/4 浅黄褐色	在地	赤色粒少	A5
	26	SK01	ミニチュア 鬼瓦	土製品	28	42	18		丸形			7.5YR7/4 に近い黄褐色	在地	中裏 型合 厚孔 2 箇所 キラツ付着	A6
	27	SK01	不明	土製品	48	(25)	(7)					7.5YR7/4 に近い黄褐色	在地	型押 キラツ付着	A7
16	29	SK02-03	皿	陶器	118	68	20		底 6/12	緑石釉		10YR7/3 に近い黄褐色	美濃	高台内輪刺 見込目取 1 箇所残	A21
	30	SK03-07	甕	磁器	100	39	55		□ 11/12	透明釉	色絵	N9/0 白	京・佐渡	色絵 (赤・緑)	A23
	31	SK03	ミニチュア 片口鉢	焼物土製品	40	19	22	48	底 6/12	透明釉		7.5YR8/4 浅黄褐色	在地		A22
	32	SK03	鉢	土製品	42	4	10		丸形			5YR6/8 褐色	在地		A24
	33	SK04	土師器皿	土器	89	39	19		□ 11/12			7.5YR7/6 褐色	在地	灯芯油燭 5 箇所残 底部穿通 赤色粒少	Q1
	34	SK04	土師器皿	土器	91	29	17		□ 7/12			10YR7/4 に近い黄褐色	在地	灯芯油燭 3 箇所残 底部穿通 海緑青針少	Q2
	35	SK04	土師器皿	土器	94	43	21		□ 11/12			7.5YR6/6 褐色	在地	灯芯油燭 4 箇所残 底部穿通 赤色粒少	Q3
	36	SK04	土師器皿	土器	115	61	22		□ 11/12			10YR7/4 に近い黄褐色	在地	赤色粒少	Q4
	37	SK04	土師器皿	土器	116	67	23		□ 7/12			7.5YR8/6 浅黄褐色	在地	内外面中央に黒斑 赤色粒少	Q5
	38	SK04	土師器皿	土器	121	68	24		□ 11/12			7.5YR7/6 褐色	在地	赤色粒少	Q7
	39	SK04	土師器皿	土器	122	72	24		□ 8/12			7.5YR6/6 褐色	在地	内面スス付着 赤色粒・海緑青針少	Q6
	40	SK04	土師器皿	土器	117	57	20		□ 6/12			7.5YR7/4 に近い黄褐色	在地	底部穿通	Q8
	41	SK07	甕物	磁器	56	52	18	49	□ 4/12	透明釉	色絵	N9/0 白	肥前	色絵 (赤 2 箇所)	Q9
	43	SK10	皿	磁器	(140)	(23)			□ 6/12	青磁釉		N9/0 白	肥前	貫入	Q10
17	44	SK12	皿	磁器		76	(17)		底 5/12	透明釉	染付	N8/0 灰白	久谷		N3
	45	SK12	小杯	磁器	52	27	25		底 10/12	透明釉	色絵	N8/0 灰白	久谷	色絵 (赤)	N4
	46	SK12	香炉	磁器		76	(20)		底 4/12	青磁釉		10YR8/1 灰白	肥前	蛇目彫製高台 見込反底	N2
	47	SK12	灯明受皿	磁器土器	112	50	20	85	□ 11/12	透明釉		5YR6/6 褐色	在地	灯芯油燭 4 箇所残	N1
	48	SK13	甕	磁器	92		(52)		□ 5/12	透明釉	染付	N8/0 灰白	肥前	口跡	N5
	49	SK15	甕	陶器		41	(31)		底 2/12	反粘	色絵	10YR7/2 に近い黄褐色	肥前	色絵 (不明色) 高台内面裏「キ」	N7
	50	SK15	鉢	磁器	146	89	50		□ 7/12 底 12/12	透明釉	染付	N9/0 白	肥前	髷付 8 弁 口跡 蛇目彫製高台	N13
	51	SK15	鉢	磁器土器	280	172	141		底 6/12	鉄釉		7.5YR7/4 に近い黄褐色	在地	足 2 箇所残 (還元 3 箇所) SK16 出土破片と接合	N6

図	番号	通稱	種類	材質	法番				通存	輪室	施付	胎土色調	産地	備考	実測
					a	b	c	d							
17	52	SK11	碗	磁器	114	37	46		□ 11/12	透明釉	染付 色絵	N9/0 白	肥前	口紅 (染付) 色絵 (刷) 高台内段有「福」	Q17
	53	SK11	小杯	磁器	65	32	43		□ 8/12	透明釉		N9/0 白	肥前	外面染付文字「通上華山石花 刻」	Q13
	54	SK11	小杯	磁器	51	32	59		□ 9/12	透明釉		N9/0 白	不明		Q12
	55	SK11	合子 (唐)	磁器	61	63	20	51	□ 8/12	(外) 青磁 (内) 透明釉		N9/0 白	肥前	内面に朱付	Q16
	56	SK11	皿	磁器	81	38	25		宛形	透明釉	染付	N9/0 白	瀬戸・美濃	型押し 雨紋・磨眼印 二次被熱、歪み有	Q28
	57	SK11	皿	磁器	94	47	23		□ 11/12	白磁釉		N9/0 白	不明	輪花 24 弁 型打ち成形 同一器体有	A30
	58	SK11	蓋	磁器	104	55	28		□ 11/12	透明釉	染付	N9/0 白	肥前		Q14
	59	SK11	蓋	磁器	95	38	24		□ 9/12	透明釉	染付	N9/0 白	瀬戸・美濃		Q15
	60	SK11	急須蓋	磁器	59		(13)		□ 11/12	透明釉	染付	N9/0 白	瀬戸	浮孔 1 箇所 61 とセット	Q25
	61	SK11	急須	磁器	67	56	64	129	□ 12/12	透明釉	染付	N9/0 白	瀬戸	磨眼 60 とセット	Q26
	62	SK11	急須	磁器	66	72	57	(78)	□ 6/12 底 4/12	透明釉	染付	N9/0 白	瀬戸	側部 14 角形 型打ち成形 磨眼	Q24
	63	SK11	火入れ	磁器	115	69	91		ほぼ完	透明釉	染付	N9/0 白	肥前	乾目製高台 見込、高台内無釉 口縁部に打ち欠き 高台内に磨眼	Q23
	64	SK11	水注	磁器	奥行 75	横 40	高 73		7/12	青磁釉		N8/0 灰白	肥前	型押し	Q27
	65	SK11	蓋	陶器	103	39	58		底 12/12	透明釉	鉄絵	2.5Y8/2 灰白	京・信濃	施地金全面に貫入	Q18
18	66	SK11	行灯蓋	磁胎土器	(192)	(186)	18		底 6/12	透明釉 白足		10YR7/4 に近い黄褐色	在池		E19
	67	SK11	燈炉	磁胎土器	166	200	109		□ 5/12	透明釉		7.5YR8/3 浅黄褐色	在池	底部磨眼 「マコ」 外面磨眼 磨眼 浮孔 3 箇所 3 箇所	A29
	68	SK11	ミニチュア 灯籠	土製品	(49)	43	42					10YR7/4 に近い黄褐色	在池	型合わせ キラコ付磨 赤色粉少	Q21
	69	SK11	ミニチュア 太鼓	土製品	49	49	65	66	10/12			10YR7/4 に近い黄褐色	在池	型合わせ 浮孔 1 箇所 内面クズリ	Q20
	70	SK11	狛犬	土製品	30	22	9		宛形			7.5YR8/4 浅黄褐色	在池	中実、型打ち 浮孔 1 箇所 キラコ付磨	T18
	71	SK11	ミニ 磁器土製品		18	7.5	13		宛形	透明釉		5YR7/6 橙	在池	型合わせ	Q19
	73	SK14	小杯	磁器	60	22	25		底 12/12	透明釉	色絵	N9/0 白	肥前	色絵 (茶・赤・不明)	E12
	74	SK14	碗	磁器	72	60	35		底 5/12	透明釉	染付	N9/0 白	瀬戸・美濃		E1
	75	SK14	碗	磁器	82	34	42		底 12/12	透明釉	染付	N9/0 白	瀬戸・美濃		E7
	76	SK14	碗	磁器	112	42	58		□ 5/12	透明釉	染付	N9/0 白	肥前		E2
	77	SK14	碗	磁器	76	36	56		□ 4/12	透明釉	染付	N9/0 白	肥前		E3
	78	SK14	猪口	磁器	84	64	57		底 4/12	透明釉	染付	N9/0 白	肥前	口縁 乾目製高台	E4
	79	SK14	紅皿	磁器	58	28	14		底 12/12	透明釉		5Y8/0 灰白	肥前	輪花 24 弁 型打ち成形	E8
19	80	SK14	紅皿	磁器	40	13	15.5		底 6/12	透明釉		5Y8/0 灰白	肥前	型打ち成形 平面六角形	E9
	81	SK14	鉢	磁器	156		(60)		□ 1/12	透明釉	染付	N9/0 白	肥前		E11
	82	SK14	皿	磁器		52	(23)		底 12/12	透明釉		N9/0 白	肥前	型押し	E10
	83	SK14	皿	磁器	110	62	26		底 4/12	青磁釉		N8/0 灰白	肥前	高台内磨眼印	E5
	84	SK14	蓋	磁器	96	36	29		底 3/12	透明釉	色絵	N9/0 白	肥前	色絵 (赤・黄・紫・緑・茶・不明) 施内段有「福」	E6
	85	SK14	碗	陶器		35	(40)		底 11/12	灰釉		10YR8/1 灰白	京・信濃	磨付摩滅大	T1
	86	SK14	皿	陶器	140	75	26.5		底 5/12	灰釉	鉄絵	N7/0 灰白	肥前	見込乾目製	T3
	87	SK14	皿	陶器	140	84	44.5		底 6/12	透明釉 白足	鉄絵	2.5Y5/1 灰灰	肥前	見込乾目製	T10
	88	SK14	鉢	陶器 (170)	76	63			□・底 1/12	灰釉		10YR7/1 灰白	肥前	歪み大	T2
	89	SK14	片口鉢	陶器	192		(86)	214	□ 10/12	透明釉 白足		10YR7/3 に近い黄褐色	肥前		E14
	90	SK14	鉢	陶器	264	100	55		底 7/12	灰釉 鉄絵		10YR7/4 に近い黄褐色	肥前	輪花 8 弁 見込胎土目 3 箇所残	E13
	91	SK14	蓋	陶器	78	38	22	26	□ 8/12 底 12/12	透明釉 白足		10YR7/4 に近い黄褐色	不明	磨眼角形 磨眼 6 箇所	T8
	92	SK14	鉢	陶器	372	168	176		底 3/12	灰釉 鉄絵		2.5Y7/2 灰黄	肥前	見込胎土目 4 箇所残 磨眼	T9
	93	SK14	灯明受皿	磁胎土器	116	44	20	88	ほぼ完	透明釉		7.5YR8/6 浅黄褐色	在池	灯芯油皿 1 箇所 外面クズリ	T7
	94	SK14	椿木鉢	土器		84	(31)	孔深 22	底 6/12			10YR7/3 に近い黄褐色	在池	外面クズリ	T4

図	番号	通稱	種類	材質	法量				通存	輪廻	施付	土色色調	産地	備考	実測
					a	b	c	d							
19	95	SK14	蓋	土器	31	7	14	19	完形			7.5YR8/3 浅黄緑	在地	外面キラツキ 突起スス付	T6
	96	SK14	男性立像	土製品	43	20	13					10YR7/4 に近い黄緑	在地	中実 型合わせ 厚孔 1箇所 白色付層有り	E15
	98	SK16	紅土	磁器	50	19	13		底 5/12	透明釉		N8/0 灰白	肥前	型打ち成形	N9
	99	SK16	皿	磁器	102	64	14		口 2/12 底 3/12	透明釉	染付	N9/0 白	肥前		N8
	100	SK17	罎	磁器		36 (54)	72		底 4/12	透明釉	染付	N9/0 白	肥前		N11
	101	SK17	罎	磁器	144	84	39		底 6/12	透明釉	染付	N9/0 白	肥前	蛇目巴製南台 高台内縁有	N12
	102	SK17	罎	陶器	96		(61)	100	口 3/12	鉄釉 灰釉	白泥	N9/0 白	肥前	鉄釉→灰釉 2度かけ	N10
	103	近代製地盤	罎	磁器	72	30	41		底 6/12	透明釉	染付	N9/0 白	肥前		A25
	106	立会調査	罎	磁器	76	33	42		口 11/12	透明釉	染付	N9/0 白	肥前		E16
	107	立会調査	罎	磁器		67	(17)		底 6/12	透明釉	染付	N9/0 白	肥前	蛇目巴製南台	E18
	108	立会調査	罎	磁器	82	34	45		底 11/12	透明釉	染付	N9/0 白	肥前		E17

第3表 瓦類観察表

図	番号	通稱	種別	表面処理	法量				重量	色調		産地	備考	実測
					a	b	c	d		土色	輪廻			
14	1	SE01	軒瓦	いぶし	(76)	(78)	20	49	220	5Y6/1 灰		在地	陶師文・唐草文	T13
	4	SE02 上層	袖枝瓦	(両面) 黒釉	312 (150)	20	64		1,300	5YR6/6 橙	10YR3/1 黒褐	能登		T11
	5	SE02 上層	枝瓦	(両面) 黒釉	306 (171)	18	(42)	1,450	5YR6/6 橙	10YR3/1 黒褐	能登			T12
	7	SE03	腰掛瓦	(表) 黒釉 (裏) 赤釉	(141)	(90)	19	36	440	2.5YR5/8 明赤褐	5YR2/1 黒褐	能登	厚孔 2箇所	A27
19	105	近代製地盤	枝瓦	(両面) 黒釉	(212)	(224)	21		1,113	2.5YR5/8 明赤褐	10YR2/1 黒	小松		A26

第4表 金属製品観察表

図	番号	通稱	種別	材質	法量					重量	備考	実測
					a	b	c	d	e			
15	28	SK01	不明	銅	(146)	11	2			16.50	厚孔 1箇所	A17
16	42	SK07	甕水通宝	銅	22	22	6.5	7	1	1.36		Q11

第5表 石製品観察表

図	番号	通稱	種別	最大長	最大幅	最大厚	重量	石材	色調	備考	実測
14	6	SE02	不明	144	151	101	1,000	凝灰岩	2.5YR/1 灰白		T17
18	72	SK11	不明	89	87	82	335	凝灰岩	10YR8/1 灰白		E20
19	97	SK14	罎	93	75	25	250	粘板岩	5GY8/1 灰白	全面磨面 表面に巴跡	T5
	104	近代製地盤	罎	120	75	18	310	粘板岩	5GY5/1 オリーブ灰	全面磨面 表面に巴跡	A28

第6表 木製品観察表

図	番号	通稱	種別	表面処理	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考	実測
20	109	SK01 北	板状	(外面) 黒漆	28	53	4		厚孔 1箇所、木釘あり 110と同一個体か	E23
	110	SK01 北	植物部材	(外面) 黒漆	55	81	5		厚孔 1箇所 109と同一個体か	E22
	111	SK01	板状		(64)	(57)	18			T19
	112	SK01 北	蓋		120	116	7		焼印「御用/八重屋」	Q31
	113	SK01	蓋			109 (89)	8			A33
	114	SK01 北	蓋		(229)	(71)	10		接合面に木釘 2箇所残	A31
	115	SK01	板材		559	460	13			E24
	116	SK14	罎	(内面) 黒漆 (外面) 朱漆		(60)	(31)			Q30
	117	SK14	不明	(両面) 黒漆	106	50	6.5		龍形 両面に真鍮製の環	Q29
	118	SK14	蓋	(片面) 黒漆	202	85	10		厚孔 2箇所残、木釘あり	E21
	119	SK14	下駄			179 (57)	30		産地 (奥厚 10mm) 厚孔 2箇所残 (厚元 3箇所)	A32

第4章 総括

第1節 調査区の変遷

第1項 近世

(1) 調査区

本書報告分を含む金沢城下町遺跡（飛梅町3番地点）の所在する地区は、藩政期を通じて加賀藩主前田家の重臣である前田家（長種系）の下屋敷地であった。藩政期の城下町絵図によっては街路を描くものがあり、敷地内には道路による区割りがあったことがわかるが、下屋敷地内の絵図は現在のところその存在が確認されていないため、具体的な居住者等は判然としない（第21図絵図A・B）。

加賀藩でいう下屋敷とはいわゆる家中町のことで、藩士の家臣（陪臣）の居住地である。加賀藩では3,000石以上の入持組には下屋敷地が藩より与えられ、一家中の陪臣団により一つの町を形成する様相であった。前田家（長種系）の場合、当主の居住する上屋敷は現在の大手町、つまり金沢城の北辺の大手門前に隣接する地にあって、下屋敷とは離れた場所にあったが、本多家（5万石）、長家（3万3,000石）、横山家（3万石）などは上屋敷地と下屋敷地とが隣接していた。

金沢城下町において下屋敷地を発掘調査した事例としては、本書で報告する飛梅町3番地点のほかに第7表に挙げた遺跡がある。

第7表 下屋敷跡の発掘調査一覧

遺跡名	家名	禄高※
金沢城下町遺跡(下本多町地区)	本多家	50,000 石
長田町遺跡	深見家	4,500 石
穴水町遺跡	長家	33,000 石
醒ヶ井町遺跡	前田土佐守家	11,000 石
金沢城下町遺跡(飛梅町3番地点)	前田家(長種系)	18,000 石

※幕末時点

(2) 前田家（長種系）

前田家（長種系）はいわゆる加賀八家の一で、初代は前田長種。藩政期中に11代孝敬までを数え、石高は初代から5代孝行までが2万石～2万1,000石、6代孝資以降は1万8,500石～1万8,000石。初代から4代孝貞までは小松城代を歴任したため屋敷は小松城内にあり、寛永16年（1639）に3代藩主前田利常が小松城に隠居するにあたり城代の任を解かれ金沢に戻り、金沢城大手門の北に上屋敷地を拝領した。この時期に下屋敷地も拝領したと思われる。初代長種が慶長6年（1601）に従五位下対馬守に叙任されたのを始めとして、歴代当主のうち7人が従五位下諸太夫に叙任されている。

初代前田長種は藩主前田家と同様に尾張国荒子の出身で、藩主家とは同姓だが別系統の家柄である。父長貞の後嗣として尾張蟹江城の城主であったが後に前田城に移り、天正12年（1584）に加賀へ下って前田利家に禄高1万石で仕えるようになったという。七尾城代、守山城代、富山城代などを歴任し、その間に前田利家の長女幸を娶るなど前田利家の信任厚く、慶長11年（1606）小松城代のときには禄高2万石。寛永8年（1631）没。

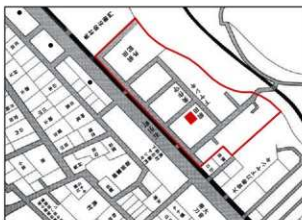
(3) 加賀八家

加賀八家は、加賀藩の行政組織における最高権力職である年寄役の職に就く門閥家のことで、他藩でいう家老にあたる。いずれも万石以上の禄高を有する大身の家臣で、本多家、長家、横山家、前田土佐守家、前田家（長種系）、奥村家（宗家）、奥村家（支家）、村井家、の8家があったことからこの名称で呼ばれる。

加賀藩では、藩主を補佐する執政役のことを総称して年寄衆あるいは年寄中と呼んでいたが、5代



【絵図A】延宝金沢図 延宝年間(1673～1681) ※注記は一部を省略

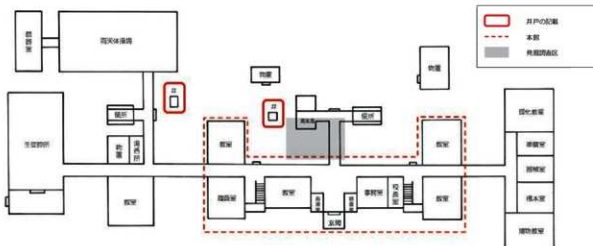


【絵図B】金沢城下絵図 嘉永元年(1848)



【絵図C】一万分の一地形図 明治21年(1888)

第21図 調査区周辺の絵図・地図(いずれもトレースのうえ加筆・修正)



石川県立第二中学校敷地(石川県立第二中学校敷地) ※トレースのうえ加筆

第22図 明治42年(1909)の石川県立第二中学校

藩主前田綱紀の時代に家柄や先祖の功績によって上記の8家が選出され、執政役である年寄衆はこの当主に限って登用することとなった。以降「年寄衆八家」と呼ばれ、年寄役は八家の当主が世襲することとなり、しだいに役職名だけでなく家格・身分の意味も帯びるようになった⁽¹⁾。以降、八家は世襲化・固定化し、藩政期を通じて八家の当主すなわち年寄衆と藩主との協調的な体制を構築することで藩政運営が行われるようになる。

八家の一である前田家(長種系)は加賀藩政の重責を担う文字通りの加賀藩重臣であり、その家中も多く、そのため広大な下屋敷地を拝領していた。その敷地の大部分は明治以降に旧制中学校用地となっており(次項参照)、調査区周辺において大規模開発が行われず藩政期の遺構が今日まで残存し得たのは、加賀藩重臣の下屋敷地であったという条件による影響が大きかった。

第2項 近代以降

(1) 調査区

明治維新後もしばらくは宅地としての土地利用が続いたと見られる。『加賀金沢細見図』(明治9年)や明治21年の1/10,000地形図(第21図絵図C)には嘉永年間の『金沢城下絵図』と同様の街路が描かれており、藩政期から大きく土地利用が変更されていないことがわかる。

明治31年(1898)、石川県が旧下屋敷地の約8割程度の6千坪余りを第二尋常中学校用地として買収し、翌32年(1899)に校舎が竣工した。これが現存する旧石川県第二中学校本館(重要文化財、以下「本館」)である。建設当初は本館とその西側に渡り廊下を介した生徒控所を建てるのみであったが、同35年(1902)に特別教室と生徒控所を増設、以降増築を繰り返す(第23図)。戦後も金沢市立紫錦台中学校の校舎として利用され続けたが、昭和43年(1968)に鉄筋コンクリート造の新校舎が敷地の南側に新築され、以降は部活動の部室などに用いられた。昭和53年(1978)以降は金沢市民俗文化財展示館(現:金沢くらしの博物館)として一般公開されている。

(2) 旧石川県第二中学校本館

金沢くらしの博物館は前述のとおり旧石川県第二中学校本館を利用した博物館である。本館は昭和49年(1974)に金沢市指定文化財に、平成11年(1999)に石川県指定文化財に、同29年(2017)に重要文化財に指定されている。

本館は金沢城下から戸室山に延びる旧石引道沿いに、前庭を介して南面して立つ。明治24年(1891)12月に改正された中学校令に基づき、石川県内に設置された中学校のうちの一つである。竣工にあたっては石川県技師の山口孝吉⁽²⁾が設計及び工事監督を務めた。以降、増築・改修等を繰り返し、昭和43年(1968)には新校舎建築により本館以外の付属建物が撤去され、同53年(1978)以降は博物館として供用されて現在に至る。平成27年(2015)から今回の発掘調査を含む改修工事が行われ、同28年(2016)にリニューアルオープンした。

本館は東西棟の主屋の両端に南北棟の翼棟を配する左右対称の木造総2階建て、建築面積603.4㎡、延床面積1,179.2㎡。主屋正面中央をやや張り出して車寄せを付ける。また、両翼棟内寄りの階段室を前面に張り出してその頂部を尖塔とする。この両尖塔と、主屋正面の張り出し上に設けられた妻破風意匠の三角屋根を合わせた外観から「三尖塔」の愛称がある。

基礎はH350mm以上のベースコンクリートを打ち、その上にレンガ基礎を設ける。基礎上端の布石、出隅部分の隅石には笏谷石を用いるほか、基礎の排気口廻りにも笏谷石を用いて意匠に変化をつける。軸組は布石の上に土台を据え、柱・間柱を建て、柱間に筋交いを設ける。1階床組みは平成10年度に全て取り替えられているが2階は当初材のままで、床下に珪砂を充填して防音性を高める工夫としてい

る。小屋組はキングポストトラス、外壁は下見板張で腰を堅羽目板張とし、屋根は寄棟造棧瓦葺で尖塔部は銅板葺とする。

本館は、明治中期の中学校令改正による設計指針に基づいて建てられた中学校建築の初期の遺例であり、建築当初の姿を良好に留めている。また、尖塔に代表される特徴的な装飾性を随所に見ることができ、建築家山口孝吉の意向をよく残している。近代の学校建築の発展過程を知る上で高い歴史的価値を有する貴重な遺構である。

第2節 遺構と遺物の概観

調査区は藩政期においては前田家（長種系）の下屋敷地であった。検出遺構の大半は土坑であり、さらに近代以降の廃絶と見られる遺構があるなど、当該期の遺構密度は高いとはいえない状況であるが、これは近代以降の整地・造成の影響にあると見られる。その中でSE01は18世紀後半の遺構と見られ、出土遺物は少ないものの梅鉢唐草文軒平瓦が出土している。下屋敷地内の施設に前田家（長種系）の家紋である梅鉢文を採用した屋根瓦が用いられていた可能性が想定され、藩政期における調査区の性格が示される事例である。なお、梅鉢唐草文軒平瓦は金沢城や土清水塩硝蔵跡などの加賀藩施設で出土例がある。

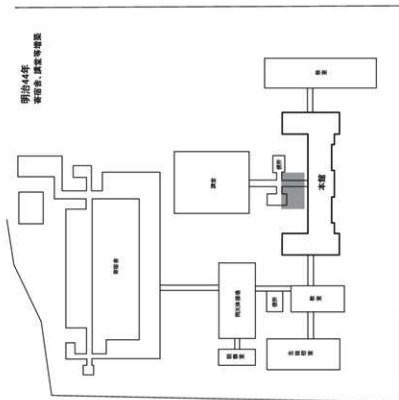
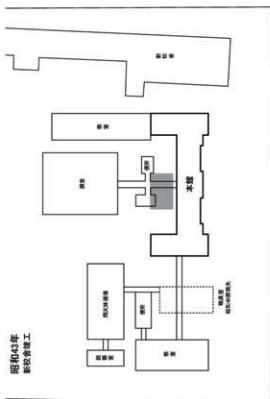
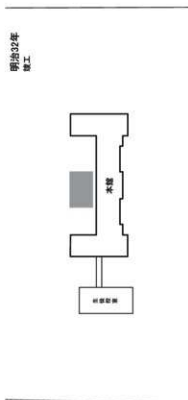
近代以降は学校用地としての歴史が長い。第3章第1節で触れたように、本調査区においては地山直上が遺構面となり、その上には近代整地層と運動場造成土が展開する。このことは、整地・造成は近世の遺構面をある程度掘り込んで行われたことを示唆するものであり、近代すなわち旧制中学校時代の造成の規模を窺い知ることができる。近代整地層からレンガや屋根瓦などを含む旧制中学校時代の遺物が出土するが、本調査区において付属建物の明確な遺構は検出されていない⁽¹⁾。井戸のうちSE02・03は昭和期の廃絶と見られ、新校舎が起工する昭和43年以降の撤去の可能性が想定される。井戸の写る古写真等は確認されていないが、明治42年（1909）の『石川県立第二中学校要覧』（宮内庁蔵）には井戸の記載がある（第22図）。検出した井戸の位置とは合致しないが、同様の井戸が他にも存在した可能性が考えられる。

なお、本来ならば本節において遺構の年代・配置等をまとめるべきであろうが、調査範囲が狭小なこと、隣接する第1次・第2次調査区で大きな面積の調査を実施していること（第2図）、などから、本遺跡の総括は次回の発掘調査報告書に譲ることとした。

【参考文献】

- 「九州陶磁の編年」九州近世陶磁学会 2000 年
- 「江戸考古学研究事典」江戸遺跡研究会 2001 年
- 「金沢市史 資料編 5 近世3」金沢市 2003 年
- 「金沢市史 通史編 2 近世」金沢市 2005 年
- 金沢市文化財紀要 280『野田山・加賀八家墓所調査報告書』金沢市 2012 年
- 金沢市文化財紀要 306『県指定有形文化財 旧石川県立第二中学校三尖塔校舎 修理工事報告書』金沢市 2017 年
- 『月刊文化財』652号 第一法規株式会社、文化庁監修 2018 年

- (1) 年寄衆八家を指す用語として現在一般的に用いられる「加賀八家」は近代以降に付けられたものである。
- (2) 山口孝吉（1873～1937）は鹿児島県出身。明治30年（1897）に東京帝国大学造家学科卒業、同年9月に石川県工師、同31年5月に同技師に任命され、同32年退職。その後海軍技師、文部省技師、東京帝国大学技師などを歴任した。石川県在籍中には第二中学校、第三中学校、第四中学校の設計監督などに携わった。
- (3) 第1次調査（平成31年度報告書刊行予定）では大正2年に増築された練武場の基礎レンガ積みを検出されており、付随建物は本館と同様の工法を採っていた可能性が高い。



第23図 旧石川縣立第二中学校 変遷図



調査区全景(北西から)



調査区全景(南西から)



調査区全景(南から)



調査風景

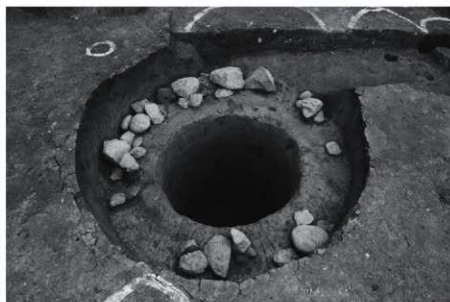
調査前状況



SE01



SE02





SE03



SK01



SK03 SK02



SK09 SK04



SK10 SK07



SK05



SK11



SK12



SK12 石組



SK13



SK14



SK15 SK11
SK16 SK10



SK20 SK19



P01



P02



SE01 石組取り外し後



SE02 石組取り外し後



SK01 土層断面



SK12 石組



SK11 出土遺物



SK11 出土遺物



SK14 出土遺物



SK16 出土遺物



SE01 梅鉢唐草文軒平瓦 第14図1



SE01 土師器皿 第14図2, 3



SE02 石製品 第14図6



SK01 碗類 第15図10, 14, 15, 16



SK01 蓋物 第15図11, 12



SK01 蓋・皿 第15図17～19



SK01 鉢 第15図21



SK01 全属製品 第15図28



SK02-03 皿 第16図29



SK03-07 碗 第16図30



SK04 土師器皿 第16図33～39



SK10 角皿 第16図43



SK12 皿 第16図44



SK15 鉢 第16図50



SK15 鉢 第16図51



SK11 碗・小杯・合子 第17図52～55



SK11 皿 第17図56



SK11 皿 第17図57



SK11 蓋 第17図58, 59



SK11 急須 第17図60, 61



SK11 火入れ 第17図63



SK11 水注 第17図64



SK11 碗 第17図65



SK11 行灯皿 第17図66



SK11 爐炉 第17図67



SK11 石製品 第18図72



SK14 小埴 第18図73



SK14 碗 第18図74~77



SK14 鉢 第18図81



SK14 皿 第18図82



SK14 皿・蓋 第18図86, 87, 91



SK14 片口鉢 第18図89



SK14 鉢 第18図90



SK16・17 皿・碗 第19図99～101



整地層・立会調査 碗 第19図103, 106～108



SK01 箱物部材 第20図109, 110



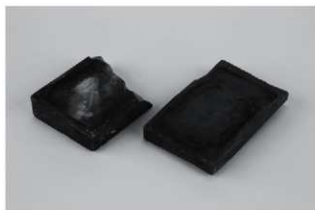
SK01 蓋 第19図112



SK01 用途不明木製品 第19図117



土製品 26, 27, 31, 32, 68～71, 95, 96



SK14・整地層 硯 第19図97, 104

報告書抄録

ふりがな	いしかわけんかなざわし かなざわじょうかまちいせき（とびうめちょうさんばんちてん）							
書 名	石川県金沢市 金沢城下町遺跡（飛梅町3番地点）							
副 書 名	金沢くらしの博物館リニューアル工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	金沢市文化財紀要							
シリーズ番号	318							
編 著 者 名	谷口明伸							
編 集 機 関	金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）							
所 在 地	〒 920-0374 金沢市上安原南 60 番地 Tel (076)269-2451 Fax (076)269-2452							
発行年月日	平成 31（2019）年 3 月 31 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯 ° 〃	東経 ° 〃	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
かなざわじょうかまちいせき 金沢城下町遺跡 （とびうめちょうさんばんちてん） （飛梅町3番地点）	いしかわけん 石川県 金沢市 とびうめちょう 飛梅町 3番31号	172014	-	36° 33° 35°	136° 40° 01°	20150717 ～ 20150831	100㎡	金沢くらしの博物 館リニューアル工 事
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
金沢城下町遺跡 （飛梅町3番地点）	城下町	江戸時代		井戸、土坑、溝		陶磁器類、土器、木製 品、金属製品、瓦		
要 約	本書は石川県金沢市飛梅町3番に所在する金沢城下町遺跡（飛梅町3番地点）の発掘調査報告書で、金沢くらしの博物館リニューアル工事に先立ち平成25年度に金沢市埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した。 金沢城下町遺跡（飛梅町3番地点）は、江戸時代においてはいわゆる加賀八家の一家で加賀藩重臣の前田家（長橋系）の下屋敷地の一角にあたる。その後明治32年から石川県立第二中学校の敷地となり、現在は金沢市立紫陽台中学校となっている。現存する石川県立第二中学校本館は金沢くらしの博物館として一般公開され、平成29年には重要文化財に指定されている。 発掘調査は金沢くらしの博物館エレベーターホール増設部分100㎡を対象に実施した。地山上で検出された遺構には井戸跡、大小の土坑、溝跡、小穴等があり、藩政期の遺構が主体となるが、井戸跡など一部に廃絶時期が近代以降に入るともがある。井戸跡SE01からは前田家（長橋系）の家紋である梅鉢文入りの軒平瓦が出土しており注目される。							

石川県 金沢市

金沢城下町遺跡(飛梅町3番地点)

— 金沢くらしの博物館リニューアル工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

(『金沢市文化財紀要』318)

平成 31(2019)年 3 月 31 日発行

発行 金沢市

編集 金沢市埋蔵文化財センター

〒920-0374

石川県金沢市上安原南 60 番地

TEL (076) 269-2451

印刷 和巧フォームズ株式会社

〒921-8147

石川県金沢市大額 2 丁目 67 番地

TEL (076) 296-8050